多賀城市文化財調査報告書 第29集

山王遺跡 ほか

—発掘調査報告書—

平成4年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序　　文

多賀城周辺の発掘調査は当市教育委員会により昭和54年の館前遺跡から本格的に開始され、本年で13年目をむかえました。この間、平成元年度より山王遺跡八幡地区において仙塩道路建設に伴う発掘調査が宮城県教育委員会と本市埋蔵文化財調査センターの担当で始まり、これまでの点の調査から面の調査へと移行し、多大なる成果を収めつつあります。

このような状況の中で、平成２年に本センターが実施した山王遺跡第９次調査では、「国守の館」と考えられる遺構が発見され、全国でも初めてのものとして注目を集めました。そこで、本市では当地区の重要性を鑑み、文化庁、宮城県教育委員会の助言を得て、現在国指定史跡の働き掛けを行っています。このため、平成２年度より「国守の館」の範囲を明らかにするための遺構確認調査を実施してまいりました。本書は平成２年～３年までの調査結果をまとめたものであり、所期の目的に添うような成果が得られました。

最後に、この調査についてご指導いただきました文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、地元協力者各位に対して深く感謝の意を表すものであります。

平成４年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
所　長　斎藤一司

例　　言

1．本書は平成２年度～平成３年度に国庫補助事業として実施した「山王遺跡 ほか 発掘調査」の成果をまとめたものである。

2．本書には西沢遺跡第１次、山王遺跡第11次・15次・16次の４件を収録し、このうち山王遺跡の３件については、『山王遺跡第９次調査関連遺構確認調査』として実施した。

3．山王遺跡第16次調査区の位置する一帯は、これまで山地田館跡として登録していたが、山地田という旧字名が他の地点にあることや、今回の調査で古代の遺構が中心に検出されていることより、山地田館跡という名称は抹消し、山王遺跡の中に包括するものとして扱った。

4．本書の執筆は、石川俊英・相沢清利が分担し、本文目次に示した。また、編集は両名で行った。

5．本書中における各遺構の略号は次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＥ：井戸跡、ＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、ＳＸ：その他

6．本書挿図中の水糸レベルは、標高値を示している。

7．調査区の実測基準線は、「平面直角座標系Ｘ」を使用し、方位の標示は座標北を用いた。

8．本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原1976）を使用した。

9．発掘調査および、報告書作成に際して、桑原滋郎、白鳥良一、後藤秀一、菅原弘樹、高橋英一（宮城県教育庁文化財保護課）の諸氏、および当センター職員に御教示、御協力いただいた。

10．本書の作成にあたっては、大山真由美、福原弥子、佐藤祐子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子、平山節子の協力を得た。

11．調査・整理に関する諸記録および出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

調　査　体　制

1．調査主体者：　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

2．調査担当者：　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長　斎藤　一司　　主査　赤坂みゑ子

研究員　滝口　卓　　石川　俊英　　千葉　孝弥

〃　　石本　敬　　相沢　清利

調　査　要　項

〈西沢遺跡第１次調査〉

１．遺跡所在地：宮城県多賀城市市川字伊保石19，23，28－１，29－１，31－１，32

２．調 査 期 間：平成２年10月22日～平成３年１月16日

３．調 査 面 積：1,278㎡

４．担 当 職 員：滝口　卓　　相沢　清利

５．調査協力者：佐藤　忠、後藤　源二郎、鈴木　博、佐藤丑之助、小幡あさ子、佐藤　玉治

〈山王遺跡第11次調査〉

１．遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字中山王13－１，23－１

２．調 査 期 間：平成３年１月28日～３月６日

３．調 査 面 積：240㎡

４．担 当 職 員：滝口　卓　　石川　俊英　　相沢　清利

５．調査協力者：阿部　三雄、阿部　公雄

〈山王遺跡第15次調査〉

１．遺跡所在地：宮城県多賀城市南宮字八幡149－１

２．調 査 期 間：平成３年７月11日～９月24日

３．調 査 面 積：205㎡

４．担 当 職 員：石川　俊英

５．調査協力者：市川　了

〈山王遺跡第16次調査〉

１．遺跡所在地：宮城県多賀城市山王字山王三区56－３，57－２

２．調 査 期 間：平成３年９月11日～11月21日

３．調 査 面 積：430㎡

４．担 当 職 員：石川　俊英　　相沢　清利

５．調査協力者：阿部　三郎

※　調査参加者：鈴木一郎、加藤昭一、松本喜一、小野玉乃、菅野恵子、熊谷好子、後藤みよ子、佐藤さき子、武田りき、平山節子、水越良子、渡辺園恵、渡辺ゆき子、赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、加藤文一、熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤恵子、後藤はつみ、桜井エイ子、佐々木四郎、菅原絹代、千葉享一、渡辺幹子、芦野しづ子、阿部米子、内海勝子、大友良子、佐藤容子、小笠原マキ子、小野寺恵子、百々みち子、宮川ハルミ

本　文　目　次

Ⅰ　山王遺跡の立地と歴史的環境……相沢…… 1

Ⅱ　山王遺跡第11次調査……石川…… 5

1　調査に至る経緯…… 5

2　調査方法と経過…… 5

3　調査成果…… 8

4　小　　結……11

Ⅲ　山王遺跡第15次調査……石川……15

1　調査に至る経緯……15

2　調査方法と経過……15

3　調査成果……16

4　小　　結……23

Ⅳ　山王遺跡第16次調査……相沢……29

1　調査に至る経緯……29

2　調査方法と経過……29

3　調査成果……30

4　小　　結……45

Ⅴ　山王遺跡第９次調査関連遺構確認調査のまとめ……石川・相沢……51

Ⅵ　西沢遺跡第１次調査……相沢……53

1　調査に至る経緯……53

2　西沢遺跡の立地と歴史的環境……55

3　調査方法……55

4　調査成果……55

5　ま と め……61

Ⅰ　山王遺跡の立地と歴史的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央に位置する仙台市の市街地から、北東約10kmに位置し、南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩釜市、南東部で七ケ浜町とそれぞれ接している。市内の地形は、北東部に利府、塩釜から続く標高20～50mの松島丘陵が、南西部に狭義の仙台平野(沖積地)が広がっている。この丘陵部と沖積地の境には、砂押川が北西から南西へと貫流し、多賀城市の地形を二分している。沖積地の微地形は、海岸部の浜提、内陸部の自然提防と低湿地に分けられている。内陸部の新田・山王地区を通る県道泉・塩釜線沿いには、砂押川と旧七北田川の沖積作用によって形成された自然提防が東西に形成されている。そしてこの自然提防の周辺および砂押川沿いには低湿地が広がっている。ただし、近年の発掘調査の成果をみると、自然提防については地質図に記載されているもの(註)よりもかなり広い範囲を占めているようである。

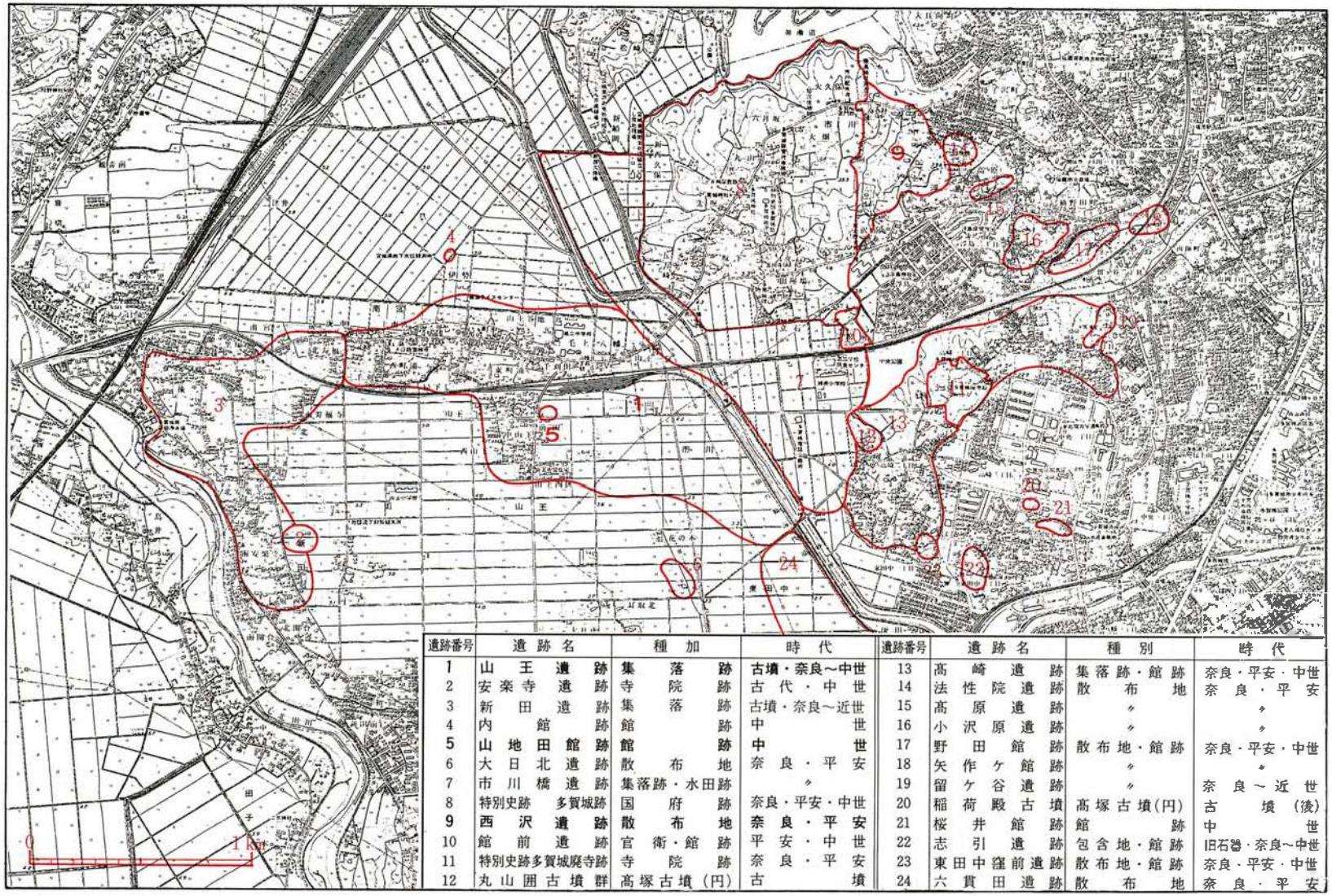
さて、山王遺跡は、前述した自然提防上に立地し、山王・南宮の両地区を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。遺跡の中央部を東西にＪＲ東北本線が走り、東寄りに陸前山王駅が位置している。そしてこの陸前山王駅の西側に隣接して山王遺跡第9次調査区が位置する。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。海抜高は約4～5mを計る。

周辺の遺跡についてみると、本遺跡より北東約0.5kmの丘陵上に古代陸奥国府である特別史跡多賀城跡が所在している。さらに、この南面一帯には市川橋遺跡があり、山王遺跡、新田遺跡とともに、古代多賀城を取り巻く大規模な集落群を構成している。

次にこれまでの山王遺跡内における調査成果をまとめてみると、第1次調査（第2図内番号①）では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡や溝跡を発見している。出土遺物としては、灰釉陶器や石帯がある。

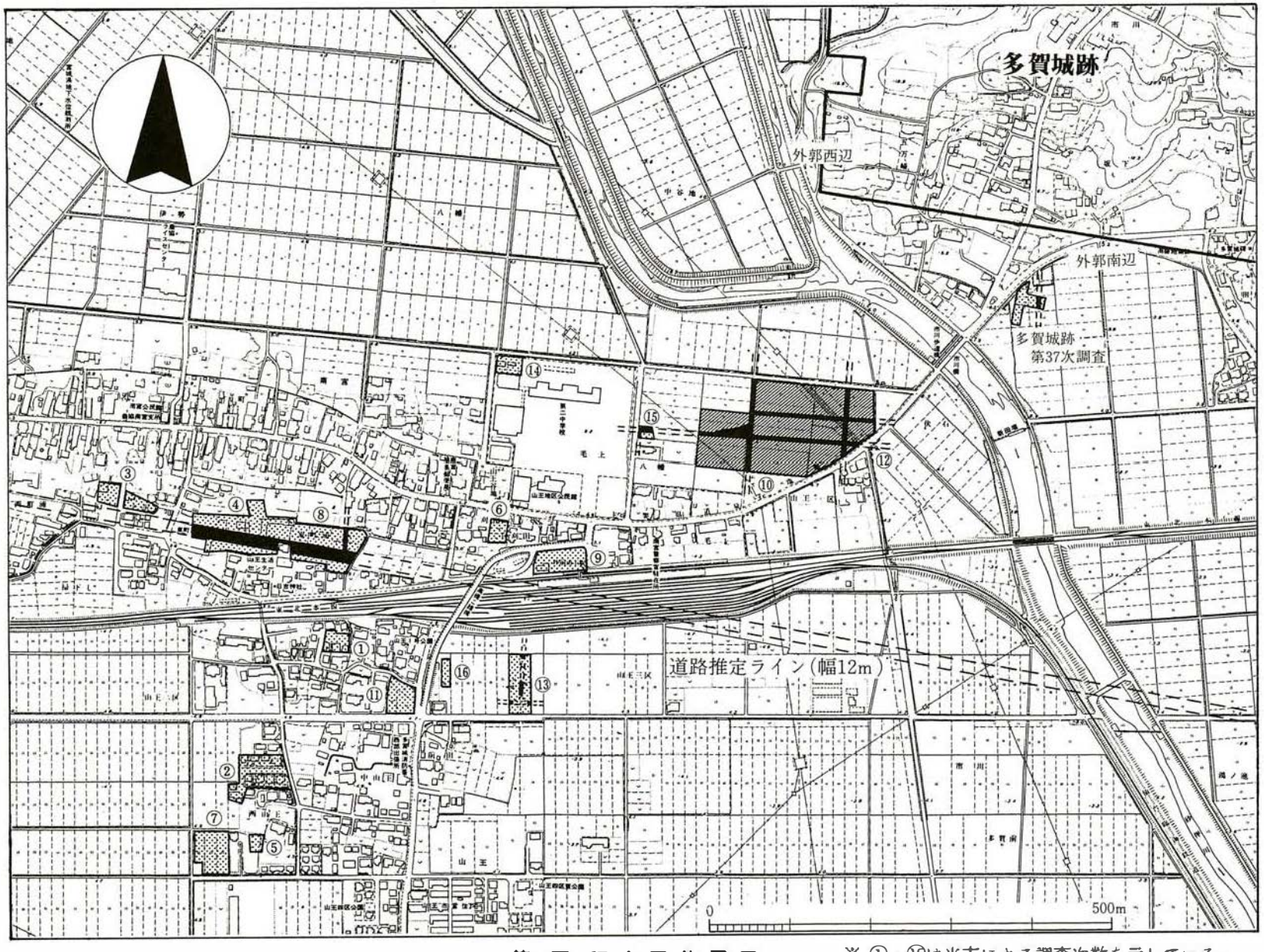
第3次調査（③）では、平安時代の掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1棟、井戸跡1基を発見している。掘立柱建物跡2棟は南側柱列がほぼ揃うので、同時期のものと考えられる。方向はＳＸ382東西道路の方向（多賀城跡外郭南辺築地の方向）にほぼ沿う。

第4・8次調査(④・⑧)では、平安時代の道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡が検出されている。道路跡は路幅約12mのＳＸ382東西道路跡を両調査区合わせて約190mにわたって検出しており、これはさらに東西方向に延びるものと思われる（仙塩道路本線敷試掘調査〈多賀前地区〉では、この道路跡の推定ラインにのってくる道路が検出されている）。方向は多賀城跡外郭南辺築地の方向とほぼ一致する。さらに第8次調査区では、東西道路に直交する路幅3.5mを計る南北道路を24mにわたって検出している。道路跡の年代は、灰白色火山灰とのかかわ



遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	山王遺跡	集落跡	古墳・奈良～中世
2	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世
3	新田遺跡	集落跡	古墳・奈良～近世
4	内館跡	館跡	中世
5	山地田館跡	館跡	中世
6	大日北遺跡	散布地	奈良・平安
7	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	〃
8	特別史跡多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世
9	西沢遺跡	散布地	奈良・平安
10	館前遺跡	官衛・館跡	平安・中世
11	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良・平安
12	丸山囲古墳群	高塚古墳（円）	古墳
13	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世
14	法性院遺跡	散布地	奈良・平安
15	高原遺跡	〃	〃
16	小沢原遺跡	〃	〃
17	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
18	矢作ケ館跡	〃	〃
19	留ケ谷遺跡	〃	奈良～近世
20	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳（後）
21	桜井館跡	館跡	中世
22	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
23	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
24	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安

第１図　多賀城市遺跡分布図



第2図　調査区位置図

※ ①～⑯は当市による調査次数を示している。

りから9世紀～10世紀中頃に位置づけられる。この他に特筆すべきこととして、東西道路に面した土坑から「観音寺」と墨書された土器が出土している。 この土坑内からは200個体以上杯がまとまって出土し、内面に油煙状の付着物が認められることから灯明皿として使用されたものとみられ、万燈会などの仏教行事が執り行われたと考えられる。そして「観音寺」は多賀城廃寺の寺名ではないかと推察されている。

第5次調査（⑤）では、平安時代の柱列跡、井戸跡、溝跡を発見した。井戸跡からは曲物や斎串などの木製品が出土している。

第6次調査区（⑥）は第9次調査区の西方約50mと最も近接した場所に位置する。ここでは東西5間、南北2間の大規模な建物跡を検出している。 方向はSX382東西道路の方向にほぼ一致する。また、井戸跡も底に曲物を据えた立派なものである。遺構の性格としては、多賀城に係る官人の居宅と考えられている。

第7次調査（⑦）では、平安時代の畑跡、溝跡を発見した。

第9次調査（⑨）では国守の館と推定される東西9間以上、南北4間の四面廂付建物跡と、それに付属する建物跡・井戸跡を発見した。年代は10世紀前半と考えられる。出土遺物の中で特筆されるのは、多量の灰釉・緑釉陶器、中国産陶磁器、そして木簡（題箋軸）である。木簡の内容は陸奥国と右大臣との間にやりとりがあったことを示すもので、『国守の館』とする裏付け資料となっている。

仙塩道路関連調査(⑩・⑫)は平成元年より3か年継続して実施してきている。多賀城跡政庁中軸線とほぼ方向が一致する南北道路およびそれに直交する東西道路が検出されている。この調査結果により多賀城跡南面に1町を単位とする計画的な地割りがなされていたことが明らかになった。

〈註〉

『広瀬川流域の地形地質調査報告書』地学団体仙台支部・仙台市科学館（1986）

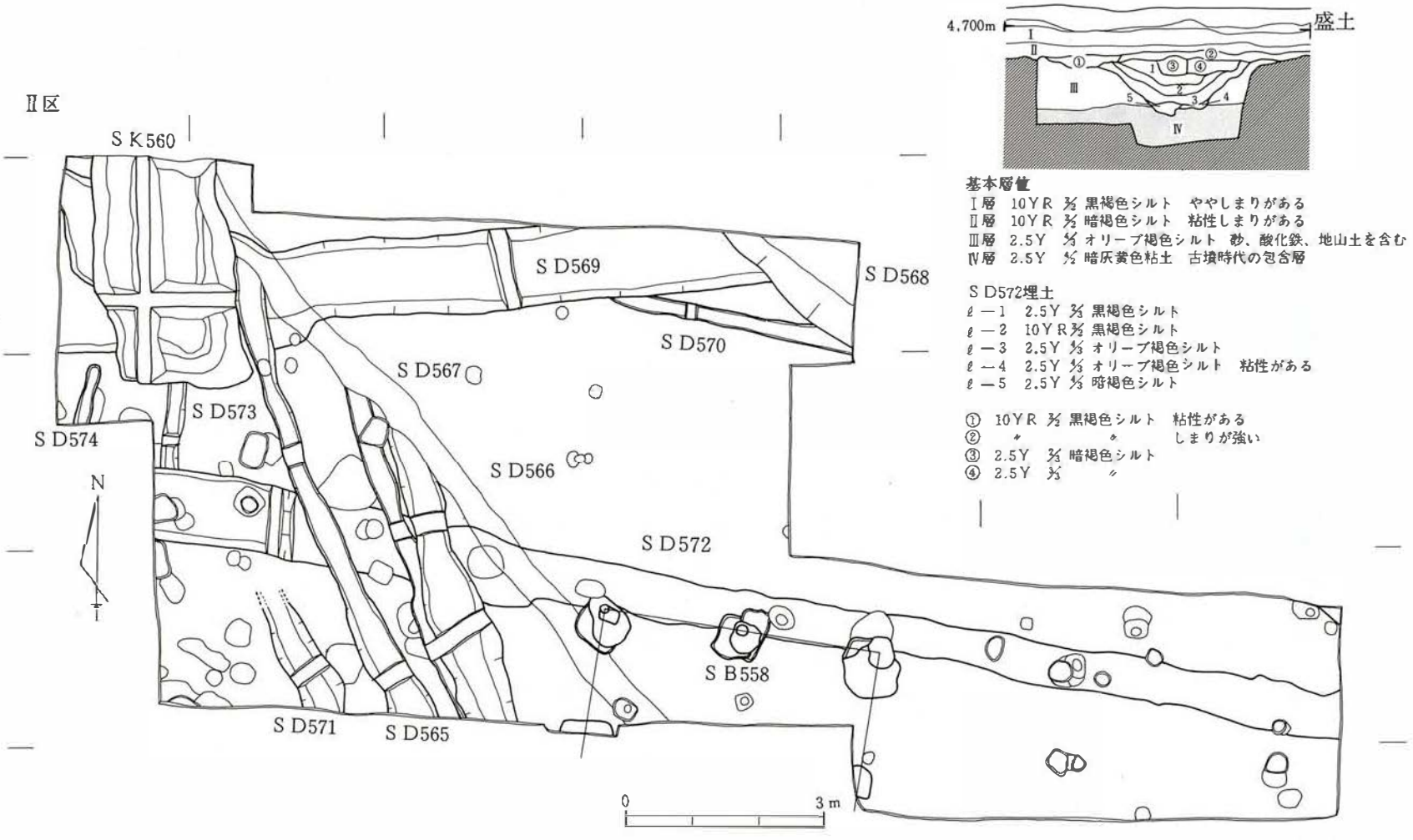
Ⅱ　山王遺跡第11次調査

1　調査に至る経緯

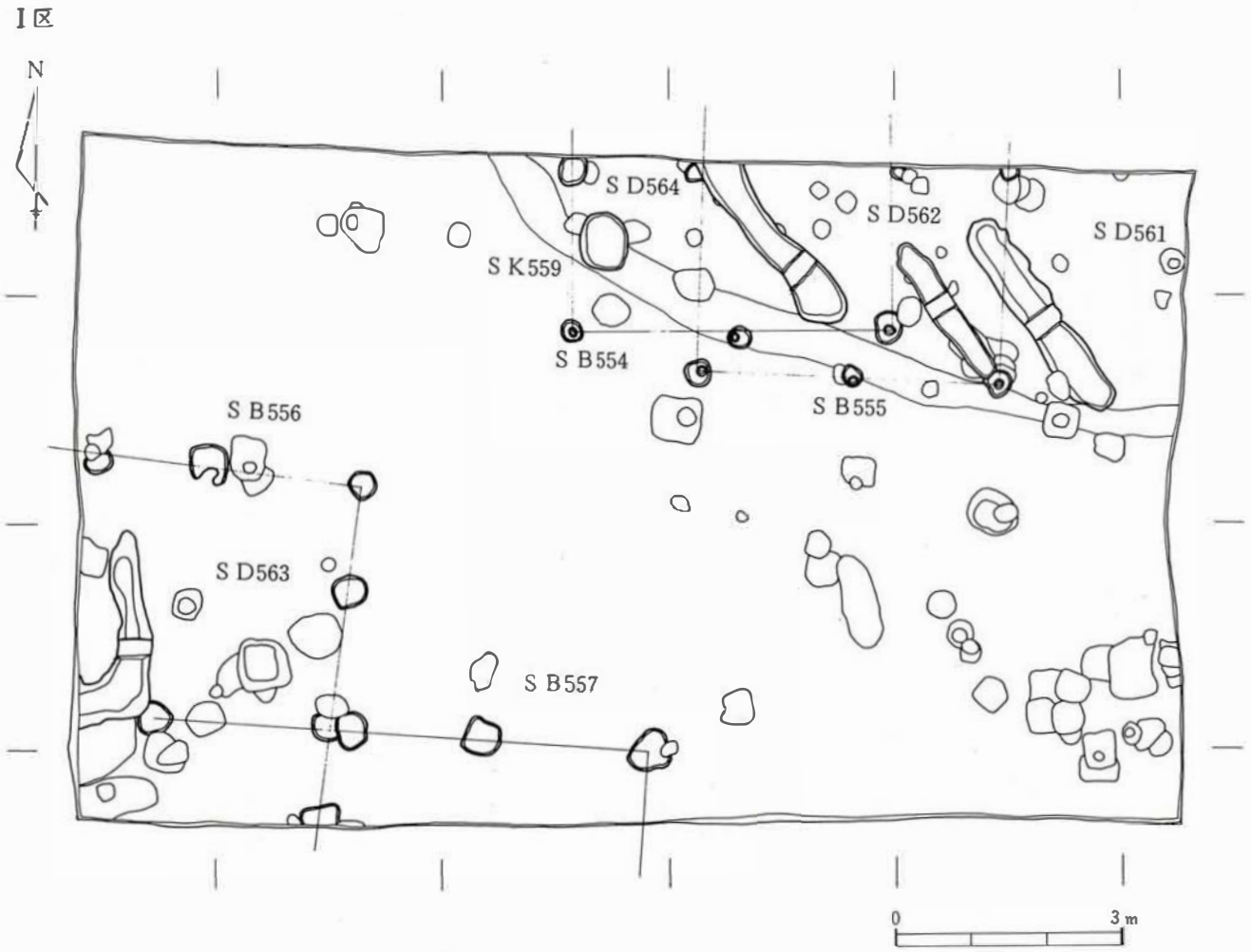
本調査については、山王遺跡第９次調査の関連調査として実施したものである。第９次調査は平成２年度に実施されたもので、調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡十数棟が重複して発見され、大木を半分に割って刳りぬいた井戸跡も見つかっている。掘立柱建物跡の中には大規模な四面廂付建物跡もあり、その柱穴の埋土から「右大臣殿・餞馬収文」と墨書された木簡が発見されている。これらの遺構に伴なって、古代の土器類が多量に見つかっており、この中には灰釉、緑釉陶器にまじって中国産の青磁、白磁もまとまって出土した。このような成果より大規模な四面廂付建物跡や井戸跡は「国守の館」の主要な一部分を構成するものと推定されるに至った。全国的に見て初めての発見である「国守の館」の遺構の広がりを把握するため、国及び県の指導を受け、遺構の範囲確認調査として実施した。

2　調査方法と経過

調査は平成３年１月25日調査区の設定から開始する。調査区の制約上、便宜上Ⅰ区とⅡ区に分ける。28日重機を導入して表土剥離を行う。調査区内はほぼ全域に削平が及び、その上に厚さ約１ｍ程の盛土が堆積している状況が観察された。30日より作業員を動員し遺構検出作業に入る。両調査区からは溝跡、土坑、柱穴等を多数検出した。この中でもⅡ区南側で見つかった柱穴２間分は径0.7 ～0.9 ｍ程の比較的規模の大きなものであった。このため柱穴の広がりを把握するために東側に拡張を行った。尚調査の性格上、遺構は確認のみにとどめて調査を進めることにした。Ⅰ区では検出した遺構には建物跡が数棟見つかった。また埋土中に灰白色火山灰を含むものも発見され、ある程度遺構の年代を知る手掛りとなった。２月７日より平面図及びセクション図作成、写真撮影を行い、15日にはこれらの調査が終了した。16日には県文化財保護課の視察があった。調査が終了したⅠ区については18日埋め戻しを行った。一方Ⅱ区は溝土坑、柱穴が重複した状況で検出された。拡張部分については確認当初の２間分のみの検出に終わり、大部分が南側に延びが及んでいることが判明した。この柱穴については２時期の重複があり、抜き取り穴も伴うことも判明した。この他の遺構についても年代等を知る手掛りを得るため掘り込みを行った。この他調査区内の土層堆積状況を観察するため一部深掘りも実施した。その結果、古墳時代の所産と考えられる遺物を含んだ包含層を確認した。３月６日には平面図作成等を終了し全景撮影を行い全ての調査を完了した。

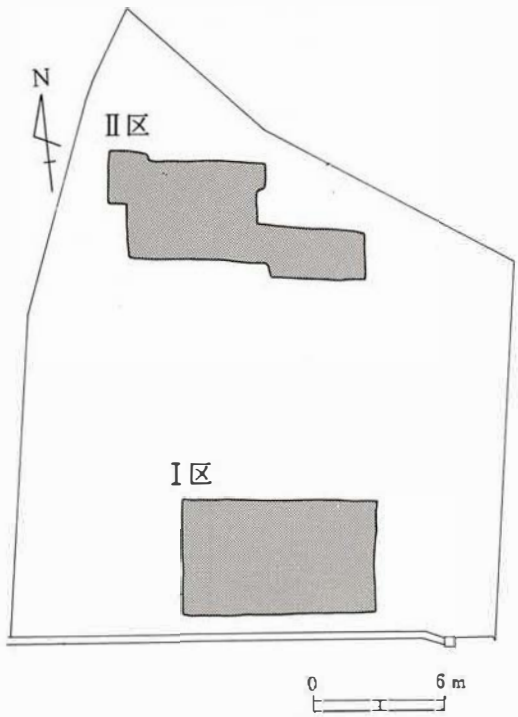


第1図　検出遺構全体図　Ⅱ区



第２図　検出遺構全体図　Ｉ区

3 調 査 成 果



第3図　調査区位置図

1．検出遺構

(1) 掘立柱建物跡

ＳＢ554：　調査区Ⅰ区北側の地山上で検出した東西２間、南北１間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ555・ＳＫ559・ＳＤ564 と重複しているが、これらとは直接切り合いがなく新旧関係については不明である。柱間は南側柱列西より2.01ｍ＋1.94ｍで総長3.94ｍを計る。東側及び西側柱間は一部柱痕跡を確認していないため柱穴をその中心に想定すると東側柱列南より約2.97ｍ、西側柱列南より約2.59ｍまで検出した。柱穴は方形もしくは楕円形を呈し、規模は0.18～0.44ｍを計る。埋土は灰オリーブシルトである。柱は確認された柱痕跡より径0.1 ～0.15ｍの円形を呈する。

ＳＢ555：　ＳＢ554 とほぼ隣接する地山上で検出した東西２間、南北１間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ554・ＳＤ561、562、564と重複しＳＤ562、564より古い。ＳＢ554・ＳＤ561とは直接切り合いがなく新旧関係については不明である。柱間は南側柱列西より2.13ｍ＋2.07ｍで総長4.19ｍを計る。東側及び西側柱間は一部柱痕跡を確認していないため柱穴をその中心に想定すると、東側柱列南より約2.05ｍ、西側柱列南より約2.07ｍまで検出した。柱穴は方形もしくは楕円形を呈し、規模は0.25～0.39ｍを計る。埋土は黒褐色シルトである。柱は確認された柱痕跡より径0.1 ～0.15ｍの円形である。

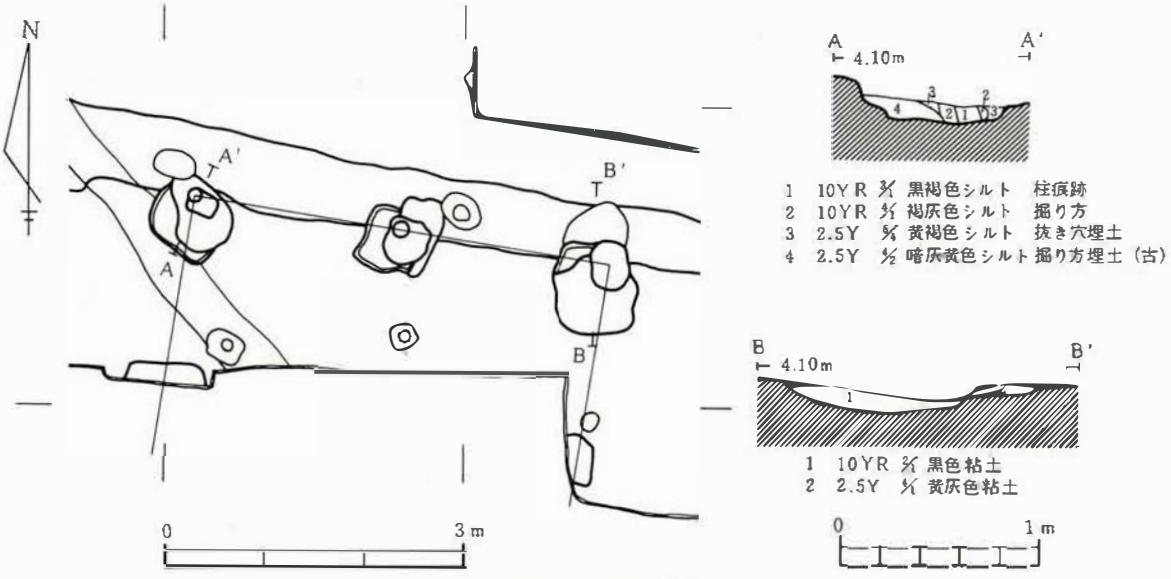
ＳＢ556：　調査区Ⅰ区南西部の地山上で検出した南北３間以上、東西２間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ557と重複しこれより古い。柱間は柱痕跡を検出していないため柱穴をその中心に想定すると、東側柱列北より約1.47＋約1.49ｍ＋約1.53ｍで総長約4.49ｍまで検出した。北側柱列は東より約1.98ｍ＋1.62ｍで総長約3.59ｍまで検出した。柱穴は遺存状況が悪く明確にプランが検出出来ないものもあったが、方形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。規模は遺存状況の比較的良好なものについて見ると約0.5 ｍ程である。埋土は地山土に黒褐色シルトブロックを含んでいる。

ＳＢ557：　ＳＢ556と同様、調査区南西部の地山上で東西に並ぶ３間分の柱穴を確認している。東側の柱穴の延びについては、東側及び北側に柱穴が検出されないことから南側に延びが及んでいるものと考えられる。柱穴西側はＳＤ563及び柱穴によって失われ、また南側についても調査区外となるために不明である。そのため建物跡の規模は東西３間もしくはそれ以上南北１間以上分しか判明できなかった。ＳＢ556と重複し、これより新しい。柱間は柱痕跡を検出していないため柱穴をその中心に想定すると、北側柱列東より約1.94m＋約1.72m＋約2.26mで総長約5.92mまで検出した。柱穴は方形もしくは楕円形を呈している。規模は0.45～0.55mである。埋土はＳＢ556と同一である。

ＳＢ558：　調査区Ⅱ区南側の地山上で検出した東西２間、南北１間以上の掘立柱建物跡である。本建物は大きく削られている。ＳＤ 572と重複し、これより古い。建物跡はほぼ同位置で２時期の重複を確認した。以下古い順に概要を記する。

ＳＢ 558（Ａ）比較的良好な北側柱列中央を参考にすると、柱穴は長方形を呈し、規模は長辺 0.7 m、短辺 0.65m前後を計る。埋土は暗灰黄色シルトで、黒色土を含んでいる。柱穴には抜き取り穴が認められ、柱位置は不明となっている。抜き取り穴は不整形を呈し、埋土は黄褐色シルトに黒色ブロックを含むものである。

ＳＢ 558（Ｂ）Ａ期の柱穴を抜き取った後、ほぼ同位置で建て替えたものである。柱穴の残存状況は悪くわずかに埋土が残っている状態であった。このため柱穴のプラン、規模等は不明となっているが柱穴２間分の内、１間分については柱痕跡を確認することができた。柱間は北側柱列東より2.12m＋2.15mで総長約4.27mを計る。埋土は粘質のある黒色土で地山ブロックを含んでいる。柱は確認された柱痕跡より径0.15m前後の円形を呈している。



第４図　ＳＢ558実測図

遺構名	検出面	重複関係	方向	長さ×幅×深さ(m)	遺物	埋土の特徴・備考
SD561	Ⅰ区 地山	SB555（新旧は不明）	NW SE	2.98×0.53×0.06	土師器杯・高台杯・甕、須恵器甕	黒褐色シルト単一層
SD562	Ⅰ区 地山	SB555 → SD562	NW SE	2.08×0.26×0.04	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯	〃
SD563	Ⅰ区 地山	SB557 → SD563	SN EW	— ×0.47×0.3	土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯、平瓦	埋土中に灰白色火山灰を含む
SD564	Ⅰ区 地山	SB555 → SD564 SB554（新旧は不明）	NW SE	2.65×0.45×0.04	な し	オリーブ褐色シルト
SD565	Ⅱ区 地山	SD569 → SD565 ← SD572, SK560	NW SE	7.2×0.57× 0.1	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	暗褐色シルト
SD566	Ⅱ区 地山	SD567 → SD566	NW SE	4.4×0.87× —	土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺、平瓦	黒褐色シルト
SD567	Ⅱ区 地山	SD572 → SD567 → SD566	NW SE	5.2× − × −	土師器杯・甕、須恵器杯・甕・壺	黒褐色シルト単一層
SD568	Ⅱ区 地山	SD569 → SD568	NW SE	不明	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	
SD569	Ⅱ区 地山	SD570 → SD569 → SD568	EW	10.2×0.98× —	土師器杯・甕・椀、須恵器杯・甕	下層は自然堆積、上層は人為的埋め戻し
SD570	Ⅱ区 地山	SD570 → SD569	EW	3.2×0.26×0.05	な し	黄色シルト
SD571	Ⅱ区 地山	ナシ	NW SE	1.8×0.61×0.09	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	黒褐色シルト
SD572	Ⅱ区 地山	SD573 → SD572 ← SB558, SD565·566·567	EW	18.3×0.84×0.28	土師器杯・甕	黒褐色シルト、オリーブ褐色シルトに大別
SD573	Ⅱ区 地山	SD573 → SK560, SD572	NS	1.3×0.27×0.08	土師器杯・甕	黒褐色シルト単一層
SD574	Ⅱ区 地山	ナシ	NS	0.95×0.22× 0.1	土師器杯・甕、須恵器杯	〃
遺構名	検出面	重複関係	平面形	長軸×短軸×深さ(m)	遺物	埋土の特徴・備考
SK559	Ⅰ区 地山	SB554（新旧は不明）	方形	0.75×0.65×0.16	な し	
SK560	Ⅱ区 地山	SD573 → SK560 SD569 → SD555	長方形	3.48×2.12× 1.3	土師器杯・甕、須恵器杯・甕、蓋、長頸壺、瓶 丸瓦、平瓦、砥石	下層は自然堆積 上層は人為的埋め戻し

第1表　溝跡・土坑概要

4　小　　結

今回の発掘調査によって検出された遺構には掘立柱建物跡５棟、溝跡14条、土坑２基、小柱穴多数である。Ⅰ区・Ⅱ区から検出された遺構の関連については不明のため各区毎に述べる。

Ⅰ区

SB555 → SD562　　∴ SB554
SB555 → SD564　　∴ SB555
　　∴ SK559
SB556 → SB557 → SD563　　∴ SD561　新旧関係不明

Ⅱ区

SD573 → SD572 → SB558
SD572 → SD567 → SD566
SD572 → SD565 → SK560　　∴ SD571
SD570 → SD569 → SD568　　∴ SD574　重複なし

Ⅰ区　掘立柱建物跡４棟、土坑１基、溝跡４条、小柱穴多数を発見している。これらの遺構中ＳＢ554、ＳＤ563の埋土中には灰白色火山灰を含むものである。このことより両者には灰白色火山灰の年代観より10世紀前半以降の年代が与えられる。またＳＢ556・ＳＤ557はＳＤ563より古いことが判明している。したがってこれらには10世紀前半頃の年代が考えられる。
一方ＳＢ555、ＳＫ559、ＳＤ561・562・564について見ると、ＳＢ555はＳＤ562・564より古いことが判明している。ＳＤ562・564からは平安時代頃の遺物が出土していることから、ＳＢ555はそれ以前と考えられる。ＳＫ559・ＳＤ561は出土遺物がなく年代等は不明である。

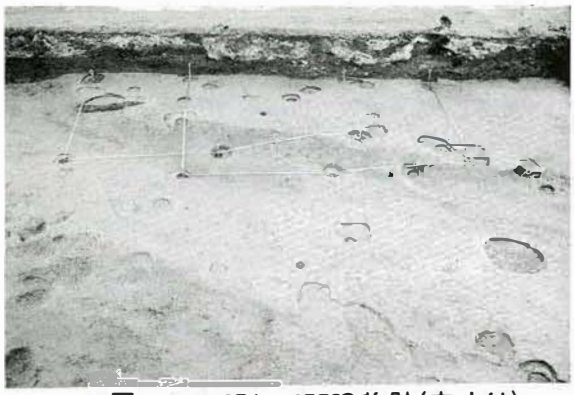
Ⅱ区　掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝跡10条、小柱穴を発見している。これらの遺構群の中で、最も新しい一群に属するＳＫ560より考える。本遺構からは土師器、須恵器をはじめ比較的遺物が豊富に出土している。この中には量的には少ないが赤焼き土器杯が含まれている。赤焼き土器の年代については、10世紀前半頃の年代が考えられている。このことよりＳＫ560より古いＳＤ565・569・570・572・573は10世紀前半以前の年代が与えられる。他の遺構については出土遺物がないものもあり年代の決め手に欠けるが、概ね平安時代頃と考えている。

尚、下層（Ⅳ層）より古墳時代中期～後期頃の包含層も確認している。

写　真　図　版

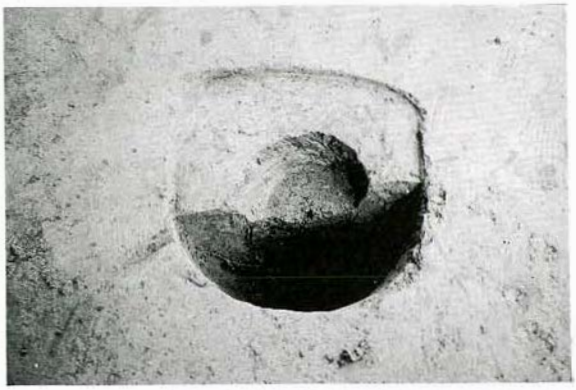
調査区Ⅰ区全景（東より）

調査区Ⅱ区全景（北より）

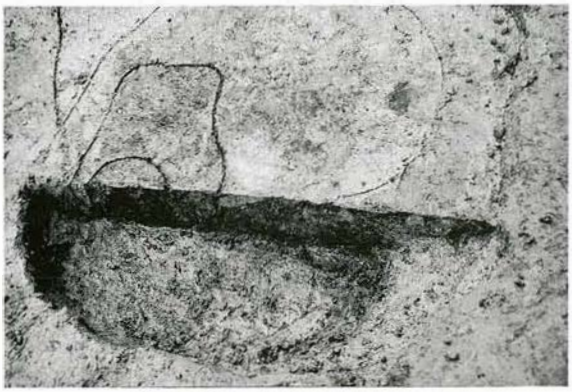


Ⅰ区　ＳＢ554・555建物跡(南より)

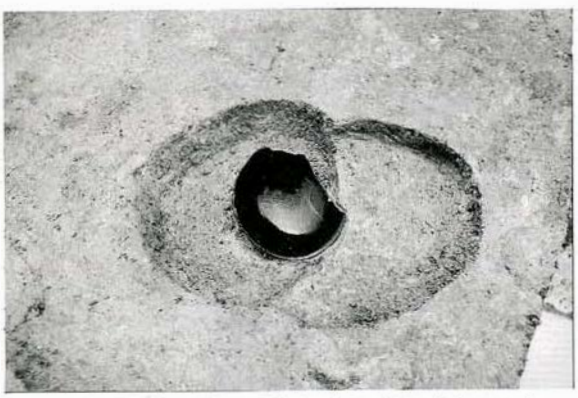
Ⅰ区　ＳＢ556・557建物跡(北より)



Ⅰ区　ＳＢ554 断ち割り状況(南より)



Ⅱ区　ＳＢ568 断ち割り状況(東より)



Ⅱ区　Pit 6遺物出土状況(南より)

Ⅱ区　ＳＫ560 土層堆積状況(東より)

1

2

3

1　土師器 杯 Pit 6　出土
2　〃　甕 ＳＤ566 出土
3　須恵器 杯 ＳＫ560 出土

出　土　遺　物

Ⅲ　山王遺跡第15次調査

1　調査に至る経緯

平成２年８月に地権者から宅地造成の計画が提示されたため本件開発計画について協議を行った。当該地区は山王遺跡の包蔵地内に位置しており、隣接する東側は仙塩道路関連の調査対象地区でもある。仙塩道路建設に係る発掘調査はすでに平成元年度より実施され、現在も継続中である。これまでの調査では古墳時代から近世までの遺構、遺物が多数見つかっており大きな成果を上げている。このため当該地区でも遺構、遺物の存在が十分予想された。更に平成２年度に実施した山王遺跡第９次調査では「国守の館」と考えられる遺構を検出し、その範囲確認を行う上でも重要性が認められた。そこで申請者に対し協力を求め、調査の日程等の話し合いを行った。その結果、宅造予定地内の発掘調査について同意が得られたため、遺構確認調査として実施することになった。

2　調査方法と経過

調査は平成３年７月11日から開始し、重機による表土剥離を行う。天候不順のため作業が遅れ表土剥離が終了したのは22日であった。遺構検出作業は23日から始まり、同日土層観察を兼ねた排水路を掘る。調査区内に堆積状況は全域に厚さ１ｍを越える盛土が堆積していた。その下層には酸化鉄層、黒褐色土層という層序が得られた。24日には黒褐色土層を掘り込んだ南北溝１条を検出した。26日には調査区内に３ｍのグリットを設定する。直ちに南北溝の平面図作成に入る。黒褐色土層上面では他に遺構が検出されなかったために除去作業を行う。黒褐色土下層でも遺構が検出されなかったため、更に掘り下げを行った。除去作業が完了し第Ⅳ層上面の遺構検出に入ったのは８月２日であった。この層からは東西溝、東から南へ屈曲する溝跡を検出した。調査の結果、これらは道路跡に伴う側溝と理解された。更に屈曲する側溝のあり方より、東西道路跡及び南北道路跡が「Ｔ」字型に合流する交差点と見られた。この道路が交差する地点からは、土師器甕２個体分を合わせて埋納した埋甕も見つかった８月９日。19日より調査を再開する。道路跡及び側溝の堆積状況を知るため断ち割りを行う。路面上に堆積した灰白色火山灰から３時期の変遷が考えられ、両側溝が同様な変遷であることを理解する。更に平面でも、断ち割りの結果と同じ成果が得られるかどうかを知るため、トレンチを設定し、同様の変遷が確認できた９月２日。９月５日にはこれまでの調査成果について埋文職員で検討する。７日県文化財保護課の視察があり指導を受ける。この間平面図作成、写真撮影、遺物の取り上

げも行う。10日には全景写真撮影を行う。翌日土壌サンプリングをもって全ての調査を完了した。尚土壌サンプリングを実施した5ケ所全てについてプラントオパールの検出が認められた。

3 調 査 成 果

1．基本層位

調査区全域にわたり厚さ1.2～1.4m程の盛土に覆われている。盛土除去後以下の層序が得られた。

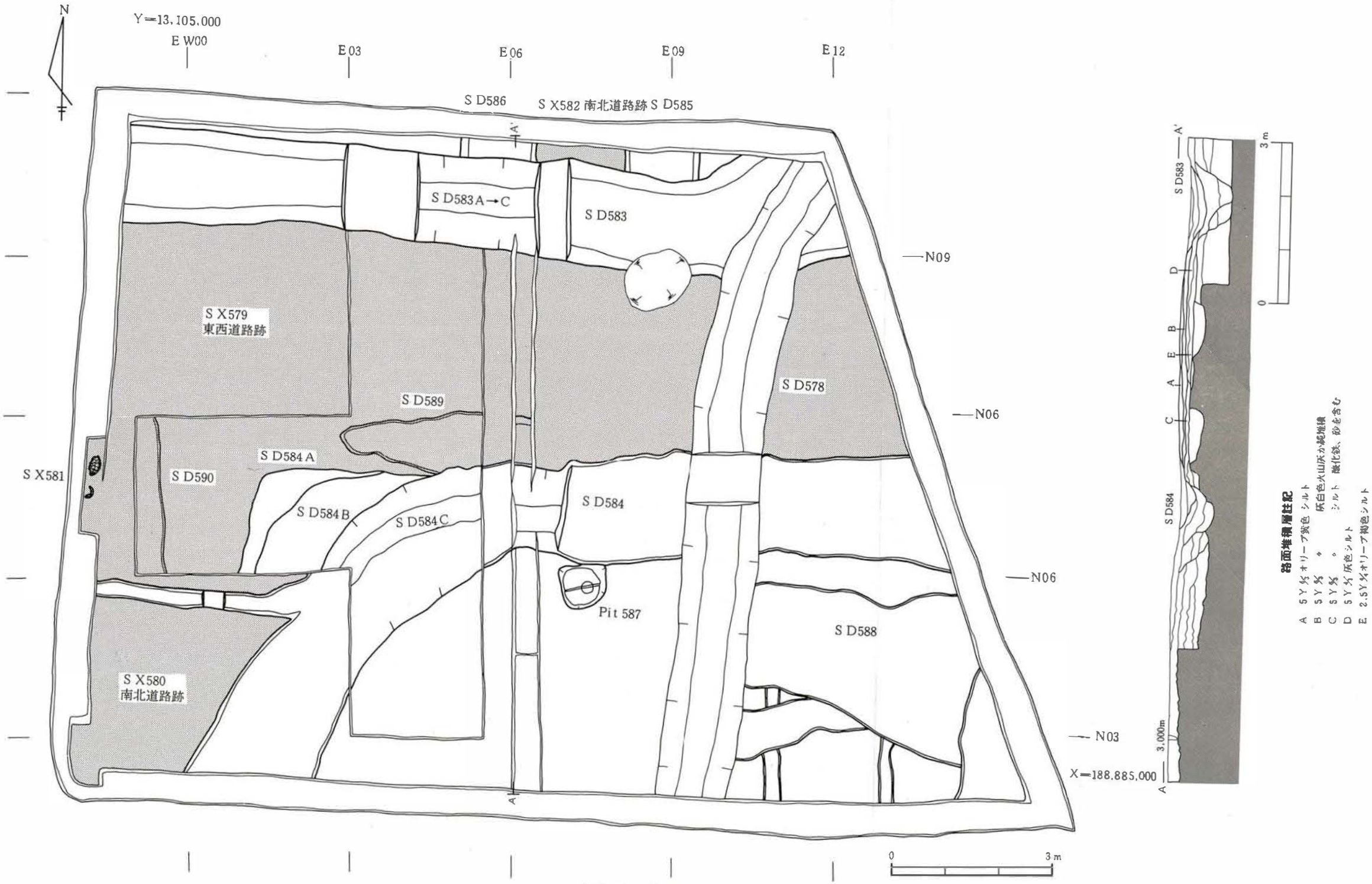
第Ⅰ層	7.5Y3/3オリーブ黒色	シルト	酸化鉄を含む
Ⅱ層	7.5YR 褐色	シルト	酸化鉄が集積
Ⅲ層	10YR3/2 黒褐色	粘 土	均質、酸化鉄を含む
Ⅳa層	10YR 灰黄褐色	粘 土	酸化鉄を含む
Ⅳb層	10YR3/2 黒褐色	シルト	砂質、酸化鉄を含む
Ⅴ層	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘 土	砂を多く含む
Ⅵ層	2.5Y5/1 黄灰色	粘 土	粘性に富む
Ⅶ層	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト	粘性のある砂質土、酸化鉄を含む
Ⅷ層	2.5Y 黄褐色	砂 層	
Ⅸ層	2.5Y5/3 黄褐色	粘 土	砂が若干層状に入る

2．検出遺構

(1) 道路跡

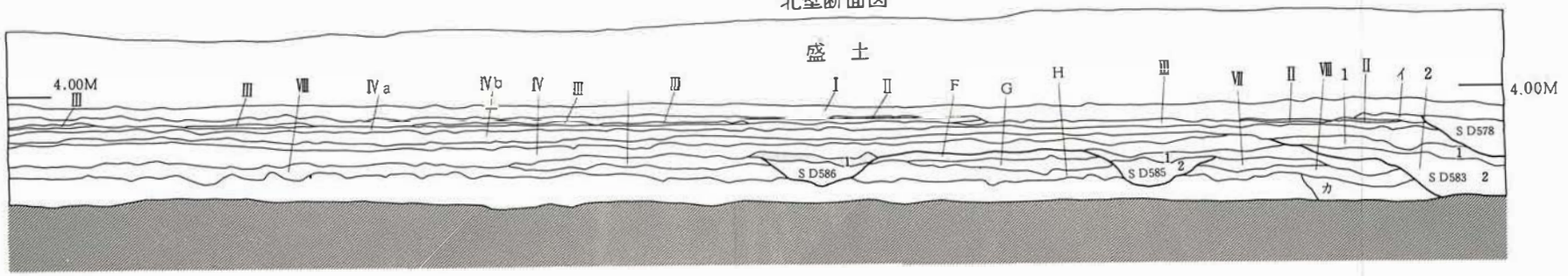
SX579東西道路跡： 調査区北側より検出した道路跡である。西側でSX580南北道路跡と「T」字型に交差する。全長約12.8mまで検出した。道路の方向は東で7度南に偏しているが東端ではわずかに北に向いており南北道路跡と交差する可能性もある。路面には地山上より順にオリーブ褐色シルト、灰色シルト、灰白色火山灰、オリーブ黄色シルトの層序で堆積している。側溝はSD583（北側）、SD584（南側）である。両者とも3時期（A→B→C）の変遷を確認している。路面堆積土と側溝の関係について見ると、C期は路面最上層オリーブ灰色シルトを掘り込んでおり、A・B期は路面堆積土に覆われ地山上面で検出した。SX582は本遺構と重複するものであるが、C期より古いことが判明したのみでA・B期どちらに伴うかは不明となっている。尚、道路側溝埋土は北側・南側ともほぼ共通した堆積状況を示しており、以下側溝埋土の説明は一括して記述する。

SX579A： SX580A南北道路跡とほぼ直角に交差する。路面幅は測定できなかった。側

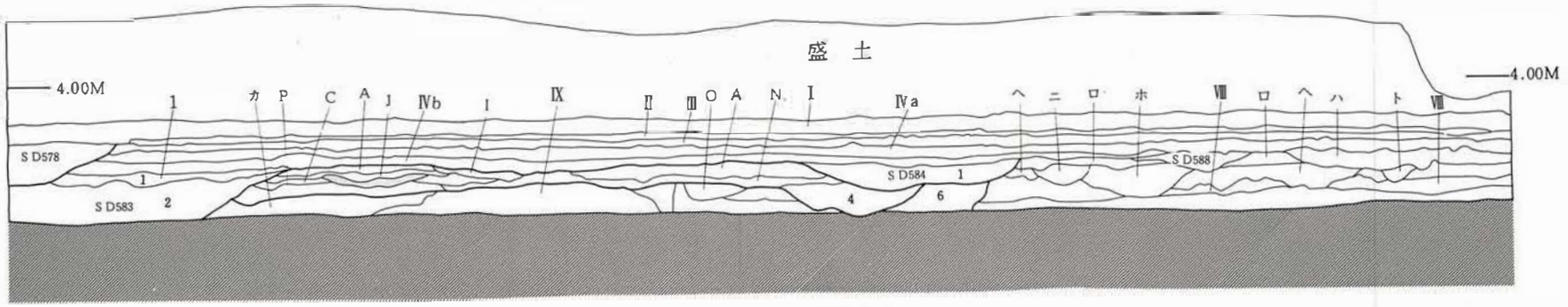

N
Y=13,105,000
E W00
E 03
E 06
E 09
E 12
S D586
S X582 南北道路跡 S D585
S D583A→C
S D583
N09
S X579
東西道路跡
S D589
S D578
N06
S X581
S D590
S D584 A
S D584 B
S D584 C
S D584
Pit 587
S D588
N06
S X580
南北道路跡
N03
X=188,885,000
0
3 m
S D583
S D584
3,000m
路面堆積層註記
A 5Y⅘オリーブ黄色シルト
B 5Y⅘ 〃 灰白色火山灰か純堆積
C 5Y⅘ 〃 シルト 酸化鉄、砂を含む
D 5Y⅘灰色シルト
E 2.5Y⅘オリーブ褐色シルト

第1図　検出遺構全体図

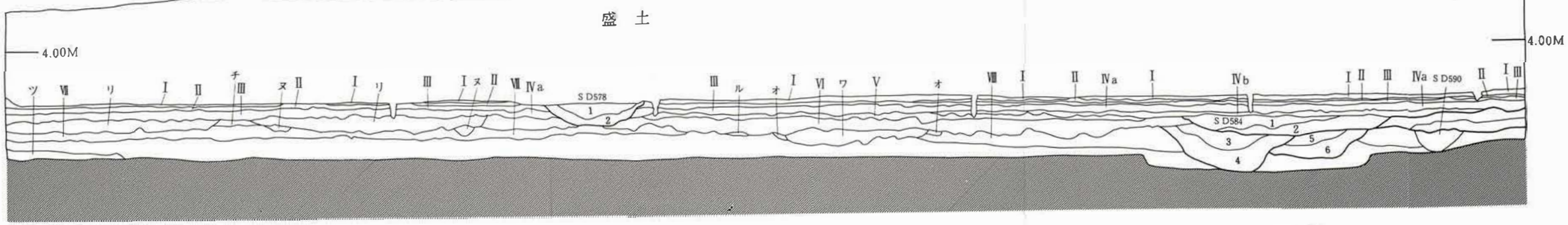
北壁断面図



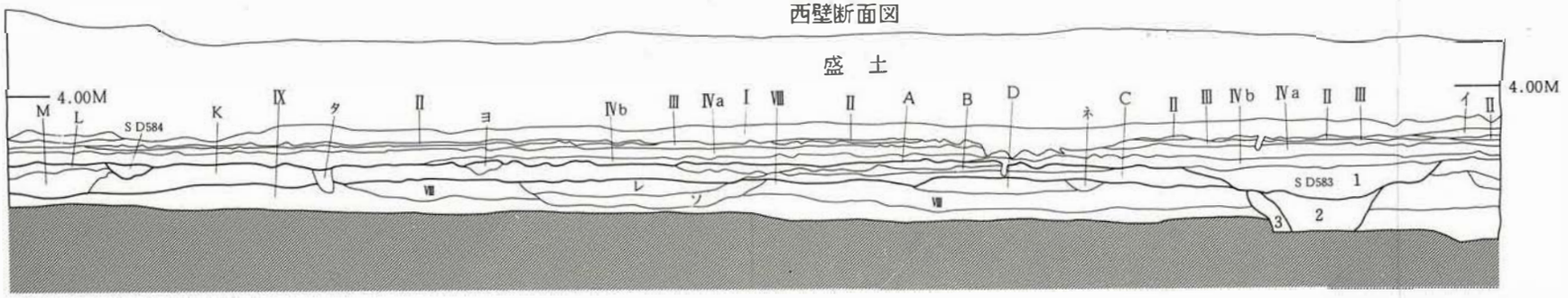
東壁断面図



南壁断面図



西壁断面図



土層註記

S D578
1　10YR3/3黒褐色シルト
2　10YR3/4　〃　〃
S D583
1　10YR3/3黒褐色粘土
2　2.5Y　3/4黄灰色シルト
3　2.5Y　4/4　〃　〃
S D584
1　10YR3/3黒褐色粘土
2　10YR4/4褐色粘土
3　10YR3/3灰黄褐色粘土
4　2.5Y　3/3暗灰黄色粘土
5　2.5Y　4/3暗灰黄色シルト
6　2.5Y　4/4黄灰色シルト
S D585
1　5Y　3/2オリーブ褐色シルト
2　10YR4/3灰黄褐色シルト
S D586
1　5Y　3/2オリーブ褐色シルト
2　10YR4/3灰黄褐色シルト
S D588
1　2.5Y　4/3暗灰黄色シルト
S D590
1　2.5Y　3/3黒褐色シルト

イ　7.5YR4/3褐色シルト
ロ　5Y　3/2灰オリーブシルト
ハ　2.5Y　4/3暗灰黄色シルト
ニ　2.5Y　3/2黒褐色シルト
ホ　2.5Y　3/3　〃　粘土
ヘ　10YR4/3灰黄褐色粘土
ト　10YR4/3　〃　シルト
チ　5Y　3/2灰オリーブシルト
リ　10YR4/3灰黄褐色シルト
ヌ　10YR4/3　〃　粘土
ル　2.5Y　3/3にぶい黄色シルト
オ　2.5Y　3/3　〃　〃
ワ　2.5Y　3/3黒褐色シルト
カ　2.5Y　3/3黄褐色砂
ヨ　2.5Y　4/3暗灰黄色シルト
タ　5Y　3/2灰オリーブシルト
レ　2.5Y　3/4黄褐色シルト
ソ　2.5Y　3/4　〃　砂
ツ　2.5Y　3/3　〃　砂
ネ　5Y　4/1　灰色シルト

路面堆積土

F　2.5Y　3/4黄灰色シルト
G　5Y　3/2灰オリーブシルト
H　2.5Y　3/4黄灰色シルト
I　2.5Y　3/3暗灰黄色粘土
J　5Y　3/2灰オリーブシルト
K　2.5Y　4/3暗灰黄色シルト
L　10YR3/3にぶい黄褐色シルト
M　10YR3/3にぶい黄褐色シルト
N　10YR3/3灰黄褐色シルト
O　2.5Y　3/3オリーブ褐色シルト
P　2.5Y　3/3黄褐色シルト

第2図　調査区断面図

溝はＳＤ583Ａ・ＳＤ584Ａである。比較的遺存状況の良好な584Ａを見ると規模は幅約2.08m深さ約0.45mを計る。埋土は下層より順に暗灰黄色シルト、黄灰色シルト、褐灰色シルトが自然堆積している。

ＳＸ579Ｂ　：　ＳＸ580Ｂ南北道路跡と緩やかに交差する。路面幅は約4.52m、東西両側溝の溝心心間距離は約5.84mを計る。側溝はＳＤ583Ｂ・ＳＤ584Ｂである。両側溝の規模について見ると前者は幅約1.3m、深さは約0.4m、後者は幅約1.48m、深さは約0.35mを計る。埋土は下層から順に黄灰色シルト、褐灰色シルトが自然堆積している。

ＳＸ579Ｃ　：　ＳＸ580Ｃ南北道路跡と大きく湾曲して交差する。路面幅は 約3.7m、側溝心心間は約5.73mを計る。側溝はＳＤ583Ｃ、ＳＤ584Ｃである。両側溝の規模は前者が幅約1.35m、深さ約0.28m、 後者は幅約1.58m、深さは約0.29mである。埋土は下層より黄灰色シルト、褐灰色シルト、黒色粘土が自然堆積している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

ＳＸ580南北道路跡：　調査区西端で検出した道路跡である。ＳＸ579東西道路跡と「Ｔ」字型に交差する。本道路跡は調査区外にその延びが及んでおり全容については不明である。またＳＤ584に対応する側溝が未検出のため路面幅、南北両側溝の溝心心間距離は測定できなかった。路面には地山上より順に暗灰黄色シルト、にぶい黄褐色シルトの層序で堆積している。ＳＸ579路面堆積土で見られた灰白色火山灰は本道路跡では確認されなかった。 これは両者の地山の高低差によるものと考えられる。側溝はＳＸ579に伴うＳＤ584が屈曲するもので同様に3時期の変遷を確認している。

ＳＸ580Ａ　：　ＳＸ579Ａ東西道路跡とほぼ直角に交差する。側溝の埋土は南壁際を参考にすると下層より黄灰色土、暗灰黄色シルトが自然堆積をしている。

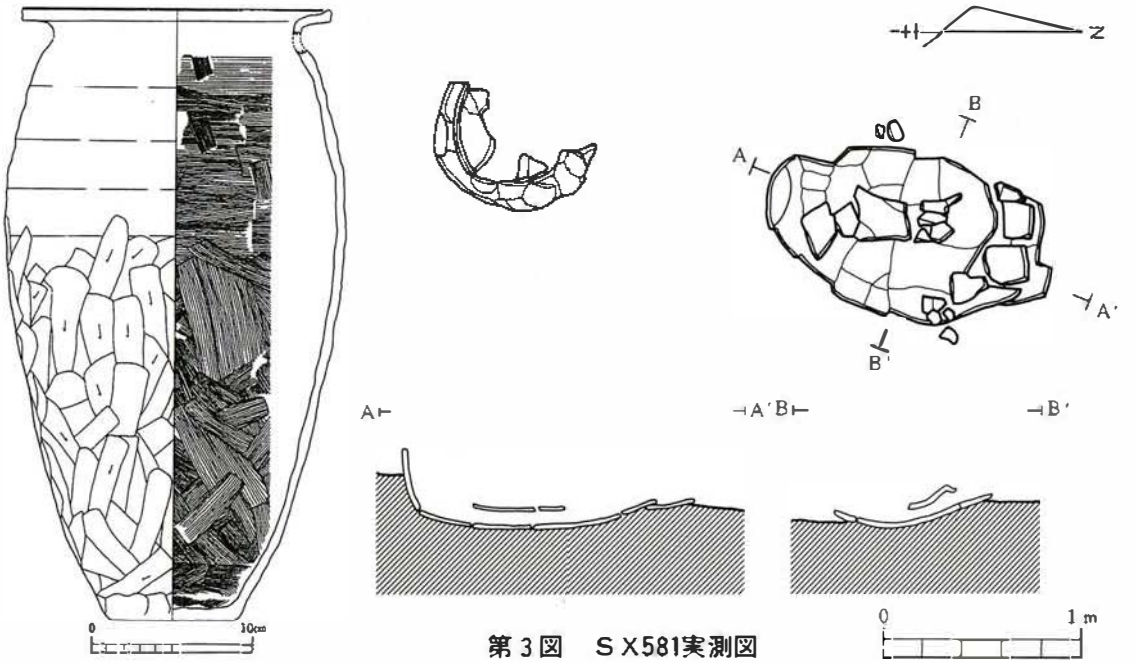
ＳＸ580Ｂ　：　ＳＸ579Ｂ東西道路跡と緩やかに交差する。 側溝は幅約1.65m、深さ約0.48mまで確認した。埋土は下層より暗灰黄色土、暗灰黄色シルトが自然堆積している。

ＳＸ580Ｃ　：　ＳＸ579Ｃ東西道路跡と大きく湾曲して交差する。路面上には ＳＤ583と平行する小溝ＳＤ591が横断する。交差点中央付近にはＳＸ581がある。側溝は幅約2.67m、深さは約0.2mを計る。埋土は下層より褐灰色シルト、黒褐色シルトが自然堆積している。

ＳＸ582南北道路跡：　調査区北側より検出した南北道路跡である。　ＳＸ579Ｃ東西道路跡と重複し、これより古く、路面幅は約1.88m、南北両側溝の溝心心間距離は約3.02mを計る。側溝はＳＤ585（東側）、ＳＤ586（西側）である。両側溝の規模について見ると前者は幅約0.95m、深さ約0.25m、後者は幅約0.99m、深さは約0.23mを計る。埋土は灰黄褐色シルトの単一層である。両側溝は廃絶後に灰白色火山灰が堆積している。

(2) 土器埋設遺構（埋甕）

調査区西端ＳＸ578C東西道路跡、ＳＸ579C南北道路跡が交差する路面上から、土師器甕が横位に据えられた状態で検出された。甕の上半部は削平により失われており、口縁部が若干離れた所より出土した。大きさは、長軸約37cm、短軸約20cmまで残存していた。更に甕の頸部下より別個体の甕体部も検出した。遺存状態が悪いため、全体の様相は不明確ではあるが、本遺構は土師器甕２個体分を合わせて埋納した合口甕と推定される。甕の主軸方向は北で 約23°東に偏している。掘り方は確認できなかった。埋土は路面上に堆積した黒褐色シルトに近似する。埋められた土師器甕は長胴形を呈し、上半分がロクロ調整、下半部はヘラケズリ調整が施されている。



第３図　ＳＸ581実測図

（単位cm）

No	器種	器形	外面の調整	内面の調整	口径	底径	器高	備考
1	土師器	甕	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラミガキ	19.4	7.6	36.9	

第４図　ＳＸ581出土遺物

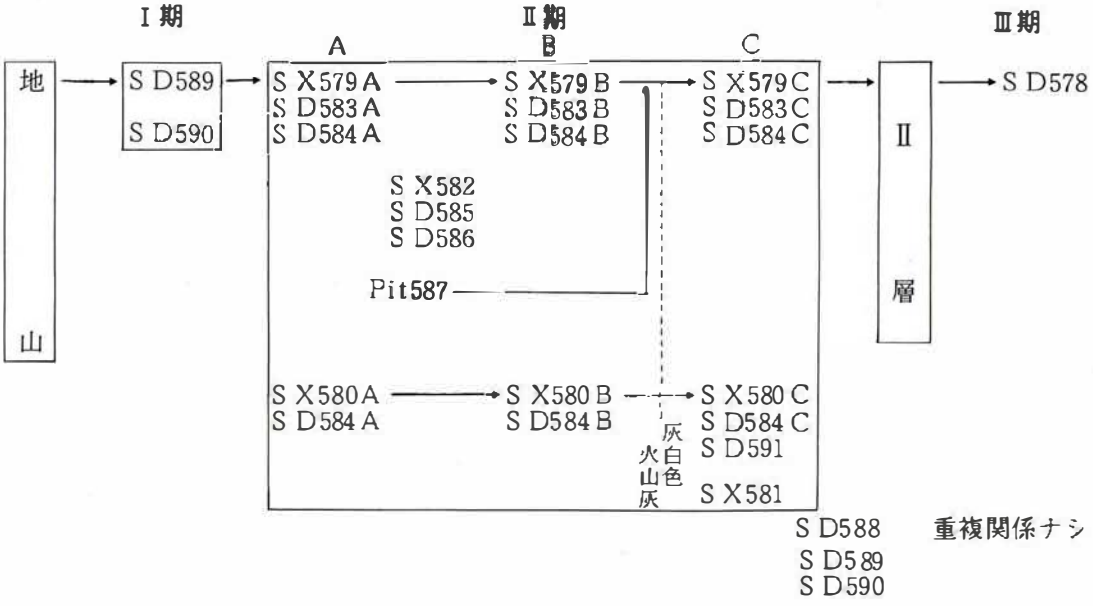
(3) 溝跡・Pit

遺構番号	検出面	重複関係	方向	規模(長さ×幅×深さ)	出土遺物	埋土の特徴・備考
ＳＤ578	Ｌ－Ⅱ	ナシ	南北	11.9以上×1.36×0.3	土師器、須恵器、杯・甕、陶磁器	黒褐色シルト
ＳＤ588	地山	ナシ	東西・南北	—	ナシ	畝状遺構
ＳＤ589	地山	ナシ	東西	3.63以上×1.08×0.28	須恵器甕	暗灰褐色シルト
ＳＤ590	地山	ナシ	南北	3.01以上×0.57×0.25	土師器(椀)、ロクロ未使用	黒褐色シルト
遺構番号	検出面	重複関係	平面形	規模（長軸×短軸）	出土遺物	埋土の特徴・備考
Pit 587	地山	Pit 587→ＳＤ584	方形	0.82×0.8	ナシ	柱痕跡有り

溝跡・Pit概要

4　小　　結

今回の調査によって検出された遺構は、道路跡３条、土器埋設遺構１基、溝路８条、柱穴１である。これらの遺構群を整理すると以下のようになる。



検出された遺構を重複関係より整理を行うとⅠ期：　道路構築以前、Ⅱ期：　道路機能時、Ⅲ期：　道路廃絶以降の変遷が認められる。ここではⅠ期及びⅡ期の主な遺構について考える。

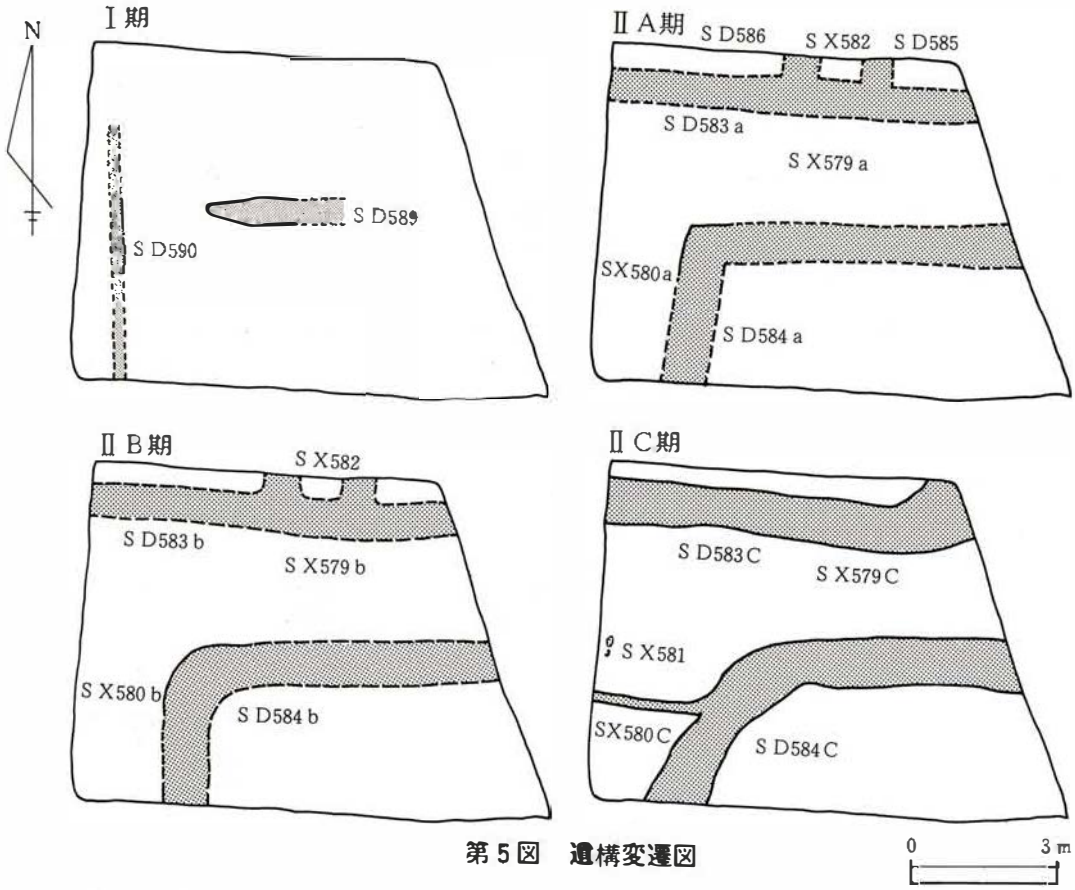
Ⅰ期　道路面下の地山上面より検出したＳＤ589、ＳＤ590がある。部分的な検出のため全容については不明となっている。

Ⅱ期　道路側溝跡の変遷よりⅡＡ～ⅡＣ期の小期に分けられる。ＳＸ582南北道路跡についてはⅡＣ期より古いことが判明しているが、ⅡＡ・ⅡＢ期のどちらかに伴うかは不明となっている。

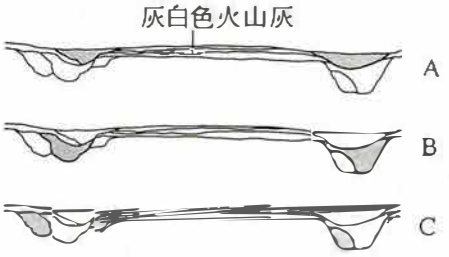
ⅡＡ期　ＳＸ579Ａ東西道路跡、これに伴うＳＤ583Ａ、ＳＤ584Ａ、ＳＸ580Ａ南北道路跡が相当する。二つの道路跡はほぼ直角に交差する。

ⅡＢ期　ＳＸ579Ｂ東西道路跡、これに伴うＳＤ583Ｂ、ＳＤ584Ｂ､ＳＸ580Ａ南北道路跡がある。二つの道路跡は緩やかに交差する。東西道路路面幅は約4.52m、東西両側溝の溝心心間距離は約5.84mを計る。

ⅡＣ期　ＳＸ579Ｃ東西道路跡、これに伴うＳＤ583Ｃ、ＳＤ584Ｃ、ＳＸ580Ｃ南北道路跡、ＳＸ581土器埋設遺構がある。　交差点は大きく湾曲する。東西道路路面幅は約3.61m、東西両側溝の溝心心間距離は約5.73mを計る。ⅡＢ期よりいくら狭くなっている。交差点中央付近より検出したＳＸ581土器埋設遺構は土師器甕二個体分を合わせて埋設したものである。



第5図　遺構変遷図



第6図　側溝跡変遷図

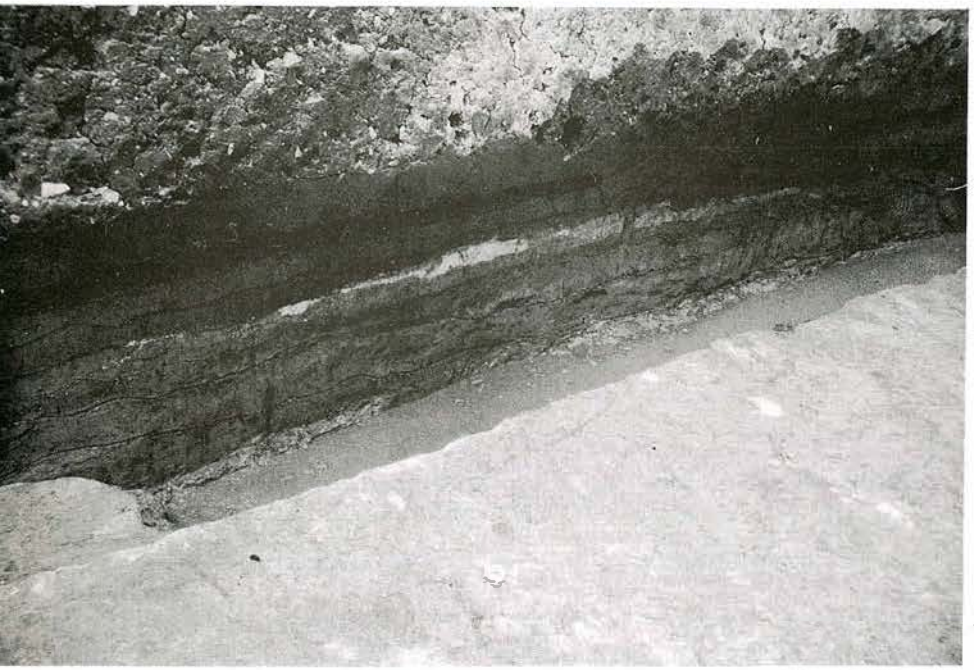
次に各期の年代について考える。Ⅰ期はSD590から 非ロクロ調整の土師器椀が出土していることから、概ね8世紀代と考えている。Ⅱ期は灰白色火山灰との関係から見ると、ⅡC期が降下以降、Ⅱ B期が降下以前の時期とに区分することができる。したがってⅡ B期の年代については、灰白色火山灰の降下年代が10世紀前半とされていることから、この以前の時期と推定される。またⅡ A期はⅡ B期に先行するが出土遺物も少なく詳細な検討を行うことができない。しかしⅠ期の年代が出土遺物より8世紀代と考えられることや、これまで周辺で検出された道路跡の年代が奈良時代までさかのぼるものが検出されていないことから9世紀代と考えておきたい。

調査区全景（西より）

写真図版１

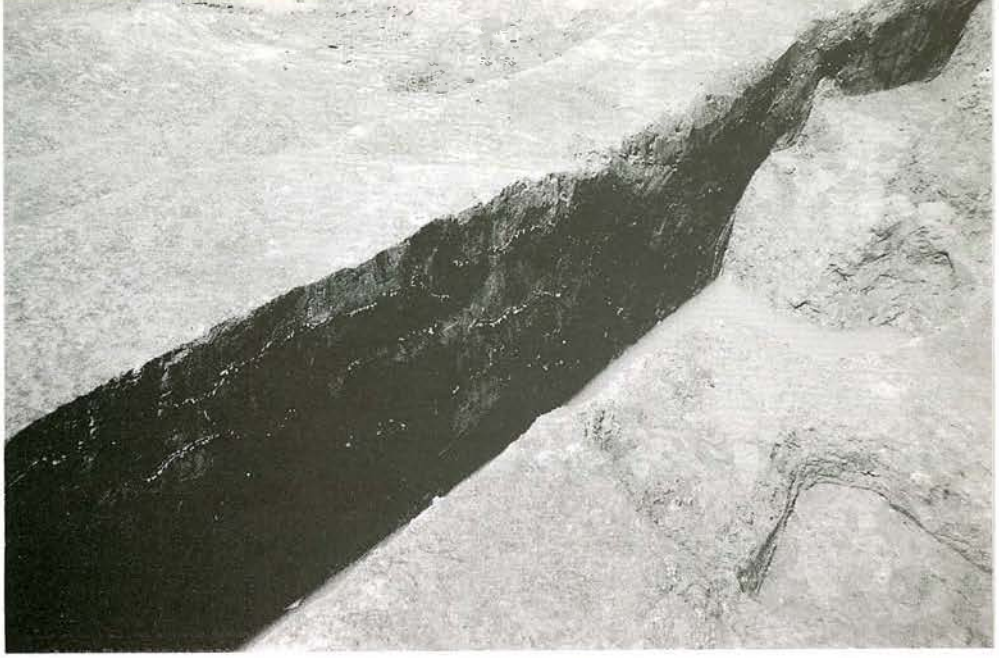
調査区全景（西より）

調査区全景（東より）



ＳＸ579東西道路跡
土層堆積状況（東より）

ＳＤ584
土層堆積状況（南より）



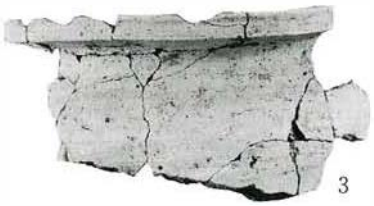
ＳＤ584
土層堆積状況（東より）

ＳＸ582南北道路跡
土層堆積状況（南より）

ＳＸ580南北道路跡
コーナー部（西より）

ＳＸ581土器埋設遺構
（東より）

ＳＸ581土器埋設遺構
（東より）



1　土師器杯　ＳＤ590出土
2　〃　甕　ＳＸ581出土
3　〃　甕　ＳＸ581出土

出　土　遺　物

Ⅳ　山王遺跡第16次調査

1　調査に至る経緯

本調査については、平成2年11月に土地所有者の阿部三郎氏より宅地造成の計画が提示されたため、本件の取り扱いについて当市教育委員会文化財係が協議を行った。当該地は広い意味では山王遺跡の範囲の中にあり、また、山地田館跡として登録されているため、古代～近世の遺構・遺物の存在が予想された。さらに当センターが平成2年に実施した山王遺跡第9次調査では「国守の館」と考えられる遺構が発見されており、これについての範囲確認調査地としても重要性が認められた。宅地造成については盛土による工法がとられるため埋蔵文化財に対する影響は軽微と考えられたため、遺構確認調査として実施することとなった。この協議に基づき、当センターと申請者との間で調査日程等の調整を行い、平成3年9月より本調査を開始した。

2　調査方法と経過

発掘調査は平成3年9月11日から重機を使用して、表土（現代の水田耕作土）剥離より開始した。重機による表土除去後、作業員を導入して排水溝を兼ねた土層観察用トレンチ（幅・深さとも50cm）を調査区の周囲に巡らせた（9月27日）。遺構検出作業は9月30日から調査区の北側から南側へと進めていった。調査区北半では多数の柱穴と溝跡、土坑が検出された。柱穴のうち比較的大きめのものは2間×2間の総柱建物跡2棟が南北に並ぶことが判明した。調査区南半では遺物を多量に含んだ黒色土（Ⅱa層）が分布しており、その上面では柱穴、井戸跡、土坑、溝跡が検出された。10月3日には調査区内に実測図作成のため国家座標を使用した簡易遣り方を設定する。10月下旬頃までにはⅡ層上面検出遺構についての実測図作成、写真撮影を完了し、さらにⅡa層を掘り下げⅢa層上面での遺構検出作業に入る。Ⅲ層上面では柱穴、土坑、小溝群を検出した。小溝群は南北・東西方向のものとがあり、調査区北半のⅤ層上面で検出していた小溝群と連続するものであることが知られた（11月上旬）。前後するが、これらの調査と並行してSD629・630の調査も行い、調査区南端付近で逆し字状に接続することから、何らかを区画する溝と考えられた。これらの溝はこれまで述べてきた遺構をすべて切って構築しており、本調査区内で検出した遺構の中で一番新しい段階に位置づけられた。このような遺構の重複関係および検出面の相違から、古い順に小溝群（畑跡）→掘立柱建物跡・井戸跡・土坑→SD629・630溝跡（区画溝）の変遷がとらえられた（11月中旬）。そして、一部の柱穴、井戸跡、土坑、溝跡の断ち割り及び平面図、断面図の作成を行う。SD629溝跡東側で検出した

ＳＢ609については当初２時期の重複を見ていたが、断ち割りの結果、ほぼ同位置で４時期の変遷が認められた。最後に調査区の全景写真を撮影した後、補足調査を行い21日には野外調査を終了した。

3　調　査　成　果

1．基本層位

本調査区周辺の土壌はシルトが主体となっているが、その生成過程の要因の相違によりシルト質粘土や粗砂などもみられる。今回の調査区では、平面、断面（調査区周辺に巡らせた土層観察用側溝）の観察によって、Ⅰ層からⅤ層までに分層された。

Ⅰ層：　10ＧＹ5/1緑灰色シルト質粘土　現代の水田耕作土。　層厚15cm前後。

Ⅱａ層：　10ＹＲ5/1褐灰色シルト　灰白色火山灰粒を含む遺物包含層。層厚５～25cm。

Ⅱｂ層：　10ＹＲ3/1黒褐色シルト　Ⅱａ層に比べ粘性を増す（遺物包含層）。層厚20cm前後。

Ⅲａ層：　５Ｙ8/2灰白色砂質シルト　粒子の粗い砂を主体とする。〈以下の層は地山〉

Ⅲｂ層：　５Ｙ7/2灰白色シルト　均質な堆積。

Ⅳ層：　2.5Ｙ5/1黄灰色シルト質粘土

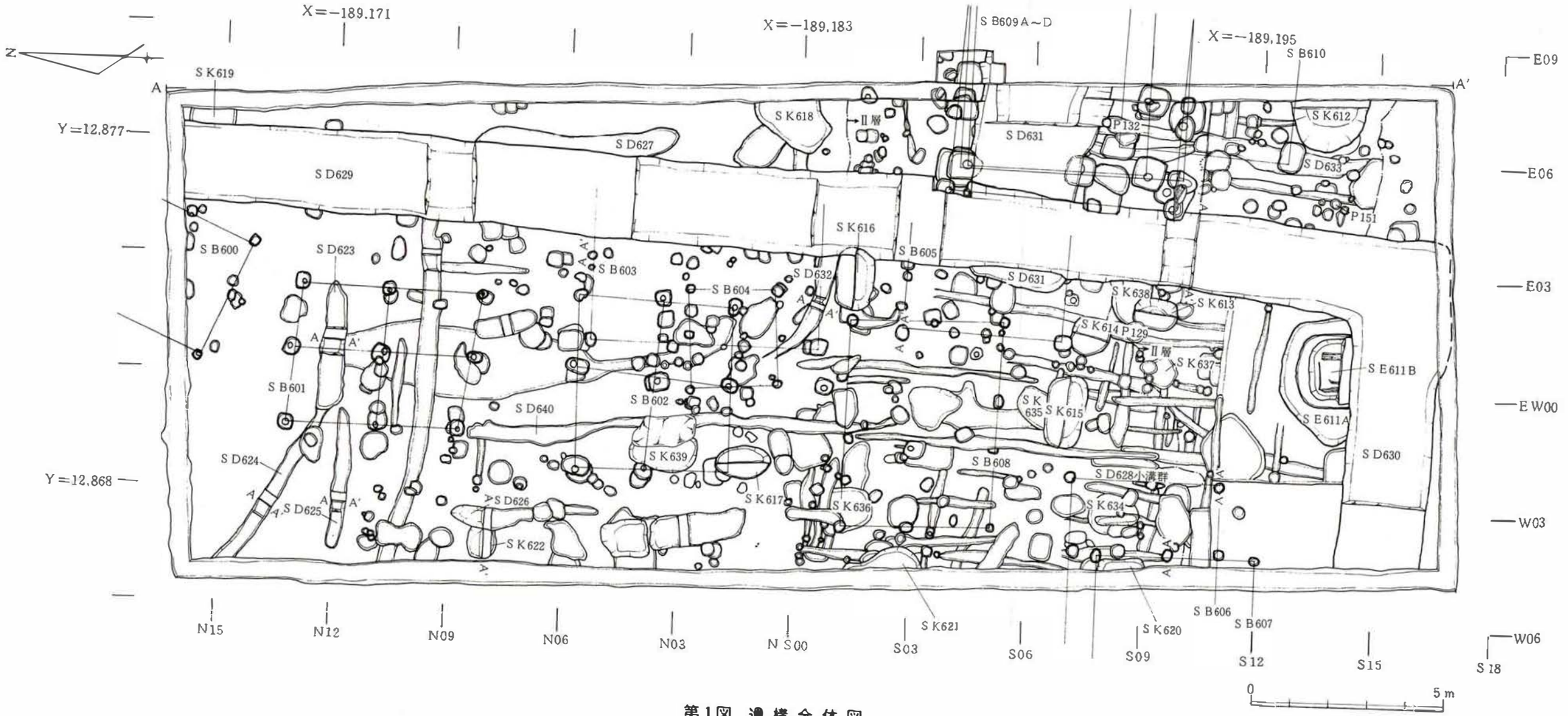
Ⅴ層：　2.5Ｙ7/4浅黄色シルト

調査区全体をとおしての土層形成のあり方をみると、最下層のⅤ層が露出しているＮ－12からＮ－07ラインまでの間が比較的高かったらしく、その北側と南側に向かってゆるやかに傾斜してゆき、その上にⅡ層～Ⅳ層が自然堆積していく様子が観察されている。Ⅱａ層はＳ08ラインより南側に分布し、ＳＥ611・ＳＫ612の遺構検出面となっている。またⅡｂ層は調査区の南端付近より南方へ分布している。Ⅲａ層より下層は遺構・遺物とも検出されていないことから地山と考えられる。Ⅱａ層の分布域より北側で検出された遺構についてはすべて地山面での検出である。

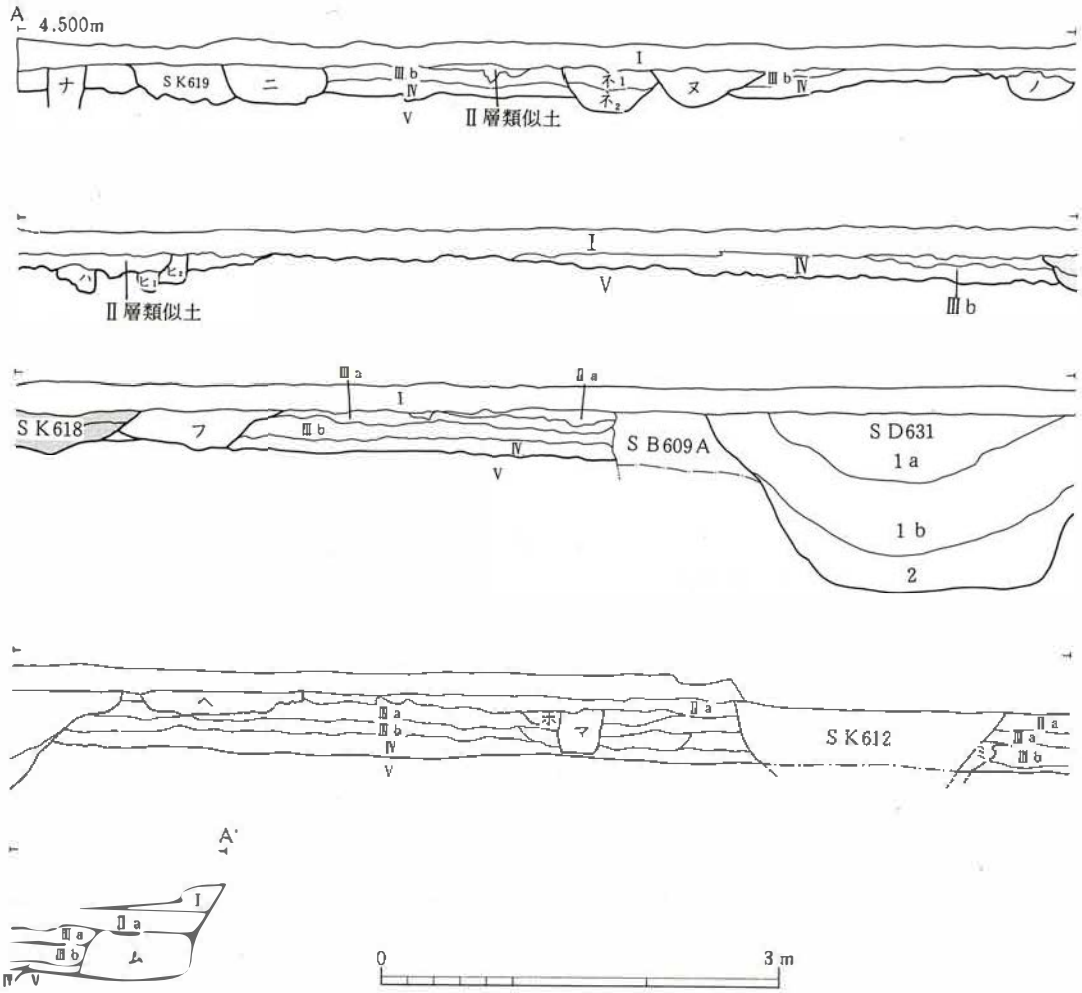
2．検出遺構と遺物

(1)　掘立柱建物跡

ＳＢ601：　調査区北半のほぼ中央、地山上面で検出した東西２間、南北２間の総柱建物跡である。ＳＤ623・624、ピット等と重複しており、ピットについては古いものと新しいものとがある。溝は直接切り合いがないため新旧関係は不明である。建物跡はほぼ同位置で１度建て替えられており（ＳＢ601Ａ→ＳＢ601Ｂ）、Ａは南側柱列と他の一部で確認できた。ここではＢについて記述する。方向は、西側柱列でみると、座標北にほぼ沿う。柱間は、西側柱列で北より、2.35m・2.13mで総長4.48mである。北側柱列では西より、1.95m＋1.75mで総長3.7 m


X=−189.171
X=−189.183
X=−189.195
Y=12.877
Y=12.868
E09
E06
E03
EW00
W03
W06
N15
N12
N09
N06
N03
N S00
S03
S06
S09
S12
S15
S18
S K619
S D629
S D627
S K618
S D631
P132
S K612
S D633
P151
S B609A～D
S B610
S B600
S D623
S B603
S B604
S D632
S K616
S B605
S D631
S K638
S K613
S K614
P129
S K637
S E611B
S E611A
S D630
S B601
S D640
S B602
S K639
S K635
S K615
S B608
S D628小溝群
S K634
S D624
S D625
S D626
S K622
S K617
S K636
S K621
S K620
S B606
S B607
0
5 m

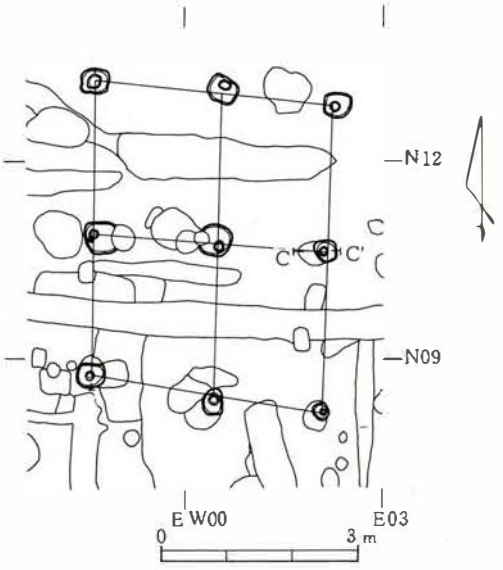
第1図 遺構全体図



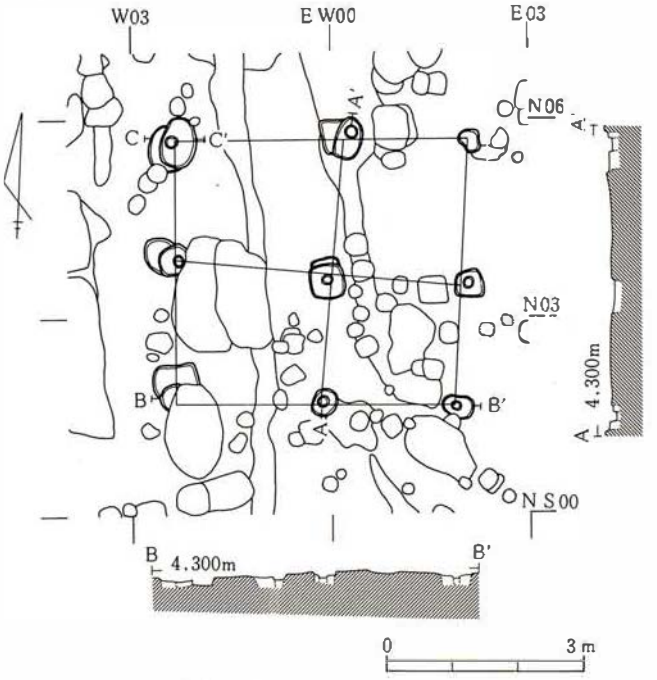
土層註記

ナ	7.5YR5/4	褐灰色	シルト	焼土、炭化物粒含む	
ニ	7.5YR5/4	褐灰色	シルト	焼土、炭化物粒含む	
ヌ	7.5YR5/4	褐灰色	シルト	マンガン斑含む	
ネ1	10YR5/4	灰褐色	シルト	炭化物粒含む	
ネ2	2.5Y7/4	浅黄色	シルト		
ノ	2.5Y8/2	灰白色	シルト		
ハ	10YR7/2	にぶい黄橙色	シルト		
ヒ1	10YR7/1	灰白色	シルト		柱痕跡
ヒ2	10YR7/1	灰白色	シルト		掘り方
フ	7.5YR5/4	褐灰色	シルト	地山、炭化物粒含む	
SD631					
1a～1b	10YR5/1	褐灰色	シルト	褐色土ブロックと地山土がまじる（人為的埋戻し）	
2	10GY5/1	緑灰色	シルト	灰黒色土と地山シルトが互層になる（自然堆積層）	
ヘ	7.5YR5/1	褐灰色	シルト	焼土、炭化物粒含む	
ホ	7.5YR5/1	褐灰色	シルト	地山ブロック含む	
マ	7.5YR5/1	褐灰色	シルト	地山粒含む	柱穴
ミ	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	地山ブロック含む	
ム	10YR5/1	褐灰色	シルト	地山ブロック含む	

第2図　調査区東壁断面図



第３図　ＳＢ601実測図



第４図　ＳＢ602実測図

を計る。柱穴は、一辺30～40m の隅丸形で、深さ30cmを計る。柱は柱痕跡より径約14cmと推定される。遺物は土師器杯、須恵器杯、赤焼き土器杯の破片が出土している。土師器杯の底部は回転糸切り無調整である。

ＳＢ602：　調査区のほぼ中央、ＳＢ601南側の地山上面で検出した東西２間、南北２間の総柱建物跡である。ＳＫ617・639 、ＳＤ640、ピット重複しており、ＳＫ617・639より古い。その他については直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物跡はほぼ同位置で１度建て替えられている（ＳＢ602Ａ→ＳＢ602Ｂ）。ここではＢについて記述する。方向は、西側柱列でみると座標北にほぼ沿っている。柱間は、西側柱列で北より1.80m ・2.08m で総長3.88 m である。北側柱列では西より2.63m ・1.82m で総長4.55m を計る。柱穴は一辺30～80m の方形もしくは不整形で深さ約50cmを計る。柱は柱痕跡より径約15cmと推定される。掘り方埋土中には灰白色火山灰粒が認められた。遺物は土師器杯・甕、須恵器瓶、赤焼き土器の破片が出土している。土師器はいずれもロクロ調整である。

ＳＢ600：　調査区北端のほぼ中央、地山上面で検出した東西２間・南北１間以上の建物跡である。重複関係からピットより新しい。方向は、南側柱列でみるとＥ－25°－Ｓである。柱間は、南側柱列で1.70m ・1.50m で総長3.2 m を計る。柱穴は、一辺30cmの方形を呈する。柱は柱痕跡より径15cmと推定される。遺物は土師器杯・甕、須恵器の破片が出土している。

ＳＢ603：　調査区のほぼ中央、地山上面で検出した東西１間以上・南北３間の建物跡である。ＳＢ602・604、ＳＤ629・632、ピットと重複しており、ＳＤ629・632より古く、ピットよ

り新しい。この他とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は、西側柱列でほぼ座標北に沿っている。柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中心に想定すると西側柱列で総長約 5.9m を計る。柱穴は一辺30～40cmの不整方形と、径20cmの円形からなり、深さ約25cmを計る。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯の破片が出土している。土師器甕にはロクロ調整と非ロクロ調整のものとがある。

ＳＢ604： 調査区のほぼ中央、地山上面で検出した東西２間・南北１間の東西棟建物跡である。ＳＢ602・603、ＳＤ632、ピットと重複しており、ピットより新しいが、その他とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は、東側柱列でみると座標北にほぼ沿っている。柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中央に想定すると、東側柱列で総長約2.25m、北側柱列で総長約2.54m を計る。柱穴は一辺約20cmの不整方形で、深さ15cmを計る。遺物は須恵器杯・甕の破片が出土している。

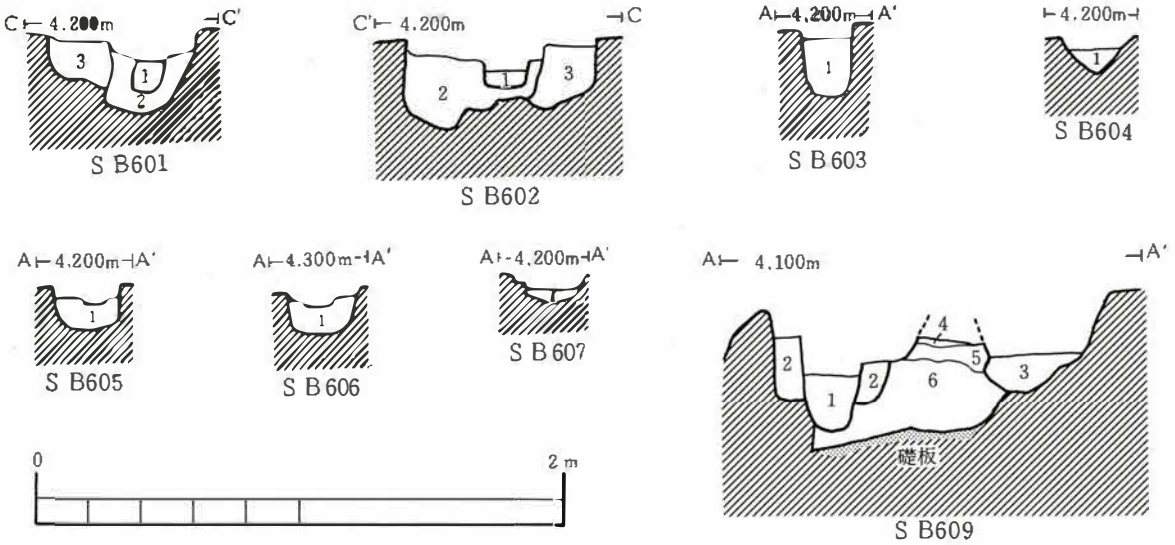
ＳＢ605： 調査区のほぼ中央、地山上面で検出した東西１間以上・南北２間の建物跡である。ＳＢ608、ＳＤ628・629・631、ＳＫ614、ピットと重複しており、ＳＤ629・631より古く、ＳＫ614より新しい。その他とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は、西側柱列でＮ－２°－Ｅである。柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中心に想定すると、西側柱列で総長約4.2m を計る。柱穴は一辺40cmの不整方形と径20cmの円形で、深さ15cmを計る。遺物は土師器甕（ロクロ調整のもの）、須恵器杯の破片が出土している。

ＳＢ606： 調査区南半の西壁寄り、Ⅱ層上面で検出した東西１間以上・南北３間の建物跡である。ＳＢ607と重複しているが直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は東側柱列でほぼ座標北に沿っている。柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中心に想定すると、東側柱列で総長約3.92m を計る。柱穴は一辺30cmの隅丸方形で、深さ17cmを計る。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯の破片が出土している。土師器杯は底部全面を回転ヘラケズリ調整するものである。

ＳＢ607： 調査区南半の西壁ぎわ、Ⅱ層上面で検出した建物跡である。南北に並ぶ３個の柱穴から推定したもので、西側が調査区外へと延びている。方向は座標北に沿っている。柱間は、東側柱列で総長約4.1m を計る。柱穴は一辺20～30cmの不整方形で深さ20cmを計る。遺物は土師器甕の破片が出土している。

ＳＢ608： 調査区中央付のやや西寄り、地山上面で検出した東西３間・南北２間の東西棟掘立柱建物跡である。重複関係からＳＤ628小溝群より新しい。方向は西側柱列でほぼ座標北に沿っている。柱間は、柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中心に想定すると、北側柱列で総長約5.36m、東側柱列で総長約3.9m を計る。柱穴は、径20～30cmの不整円形を呈する。遺物は土師器甕、須恵器杯、赤焼き土器杯の破片が出土している。

S B609：　調査区南半の東寄り、Ⅱ層におおわれ地山上面で検出した東西1間以上・南北3間の建物跡である。S B610、S D628・629・631と重複しており、S D629・631より古く、S D628より新しい。S B610については直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。建物跡はほぼ同位置で4期の変遷が認められた（S B609A→B→C→D）。ここでは比較的残りが良く、柱痕跡を検出しているC期とD期についておもに記述する。方向は、C期で座標北にほぼ沿い、D期ではN－4°－Eとなっている。　柱間は、西側柱列で北より2間分で2.90m・1.77mで総長4.67m（C期）、同じくD期では北より2間分で3.76m・2.04mで総長5.8mを計る。柱穴は、A期で一辺80cmの方形、深さ70cm、C期で一辺80cmの方形、深さ40cm。D



土　層　註　記

S B601

1	2.5Y 5/2	暗灰黄色	シルト	柱痕跡B期
2	2.5Y 5/4	暗灰黄色	シルト　地山粒子含む　ややしまっている	掘り方B期
3	2.5Y 5/4	黄灰色	シルト　炭化物、地山粒子含む	〃　A期

S B602

1	10YR 3/2	暗褐色	シルト　炭化物ブロック含む	柱痕跡B期
2	10YR 3/3	暗褐色	シルト　地山粒子、炭化物粒子含む	掘り方B期
3	2.5Y 3/2	黒褐色	シルト　地山ブロック、砂を含む	〃　A期

S B 603

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト　炭化物粒子含む	

S B 604

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト　焼土粒子、炭化物粒子含む　粘性あり	

S B 605

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト　地山ブロック、炭化物粒子含む	

S B606

1	10YR 3/2	黒褐色	シルト　炭化物粒子、砂を含む	

S B607

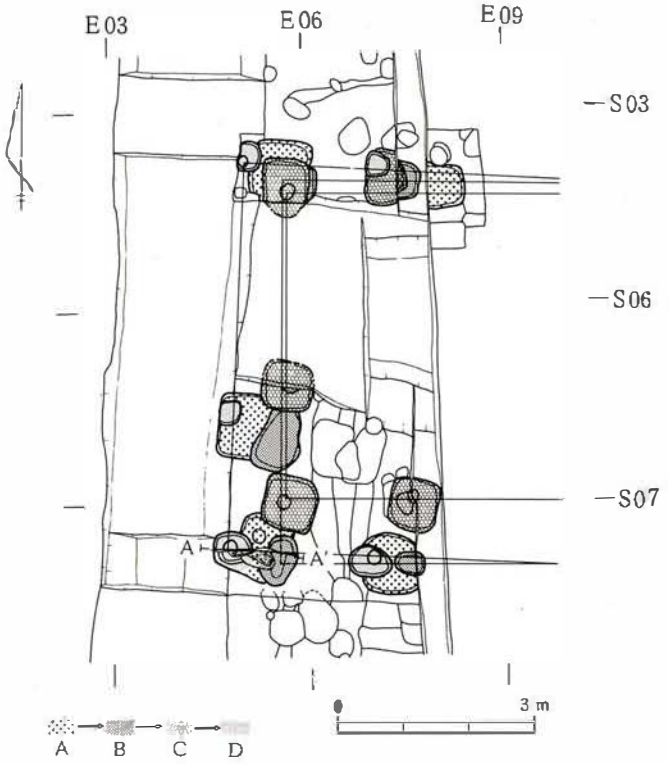
1	10YR 3/3	黒褐色	シルト　粘性若干あり、地山、炭化物粒子含む	

S B609

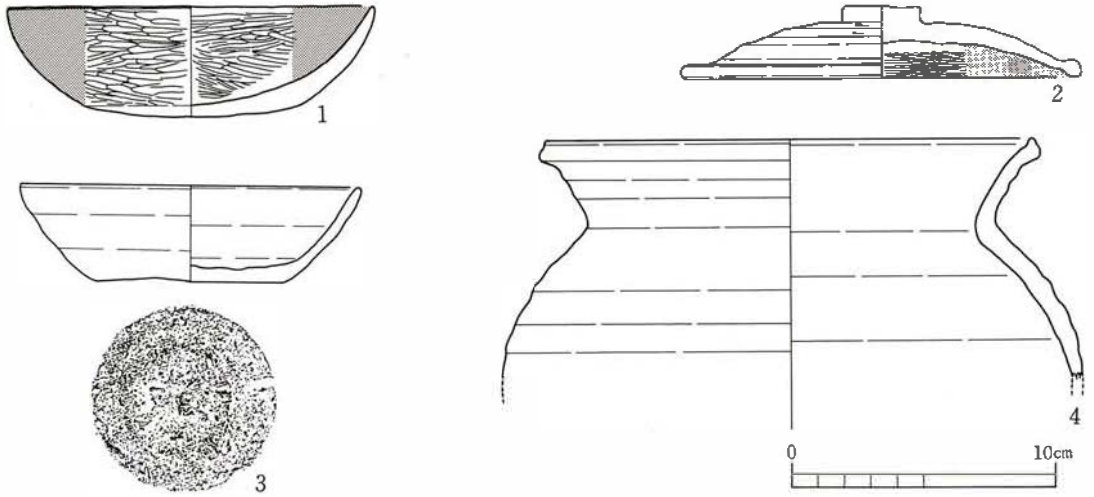
1	10YR 5/2	にぶい黄褐色	シルト　地山ブロック、炭化物粒子をわずかに含む	柱痕跡D期
2	10YR 3/2	暗褐色	シルト　地山ブロックを多量に含む	掘り方D期
3	10YR 5/2	灰黄褐色	シルト　地山ブロック含む	〃　B期
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト　地山土がブロック状に入る	〃　A期
5	10YR 3/1	黒褐色	シルト　地山粘土、炭化物含む	〃　〃
6	10YR 3/2	黒褐色	シルト　地山土がブロック状に入る	〃　〃

第5図　建物跡柱穴断面図

期は一辺40～70cmで隅丸方形のものと不整形のものとがあり、深さ40cmを計る。柱は柱痕跡より各期とも径20cmと推定される。遺物は土師器杯・高台付杯・蓋・甕、須恵器杯・瓶・甕の破片が出土している。　A期の土師器には非ロクロ調整の杯（第７図１）ロクロ調整の杯・蓋（第７図２）・甕があり、杯はすべて内面黒色処理されている。このなかでロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のものと切り離し不明で再調整されたものとがある。須恵器杯は底部がヘラ切りでナデ調整のものである。Ｃ期の土師器にはロクロ調整の杯・高台付杯・甕があり、このなかで杯・高台付杯は内面黒色処理されている。杯には体部下半まで回転ヘラ削り調整されているものがみられる。須恵器杯には底部が回転糸切り無調整のものとヘラ切りでナデ調整のものと



第６図　ＳＢ609実測図



（単位cm）

番号	器種	石質	遺構番号	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	土師器	杯	ＳＢ609 Ａ	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	片	114.0		4.2		Ｒ－21	
2	土師器	蓋	ＳＢ609 Ａ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理		15.0		2.7	つまみ径2.8cm	Ｒ－17	
3	須恵器	杯	ＳＢ609 Ｃ	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切りのちヘラナデ	ロクロナデ		13.0	6.1	3.6		Ｒ－19	4－9
4	須恵器	甕	ＳＢ609 Ａ	ロクロナデ	ロクロナデ		18.4				Ｒ－18	

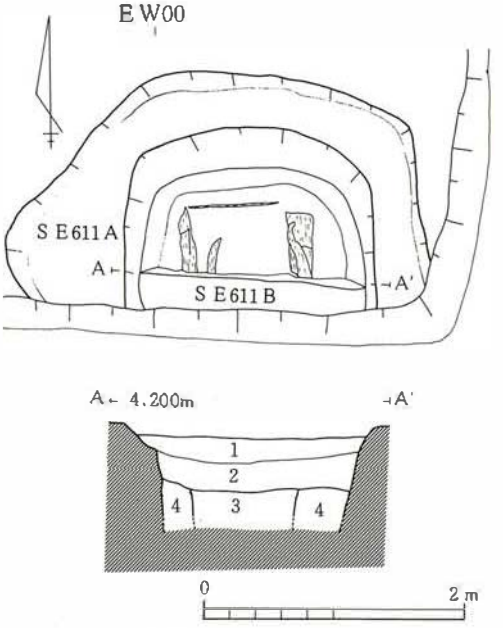
第７図　ＳＢ609出土遺物実測図

がある。D期ではロクロ調整の土師器杯、須恵器杯・甕の破片がみられる。

ＳＢ610：　調査区南半の東壁寄り、Ⅱ層におおわれ地山上面で検出した建物跡である。南北に並ぶ3個の柱穴から推定したもので、東側は調査区外へと延びている。ＳＢ609、ＳＤ628と重複しており、ＳＤ628より新しいが、ＳＢ609とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は座標北に対して約3°～5°東に偏している。柱間は柱痕跡を確認していないため柱穴のほぼ中央に想定すると、西側柱列で総長約 4.5ｍを計る。柱穴は60×80cmの長方形である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯の破片が出土している。土師器杯・甕はロクロ調整である。須恵器杯の底部には回転糸切り無調整のものと全面手持ちヘラ削りのものとがある。

(2) 井　戸　跡

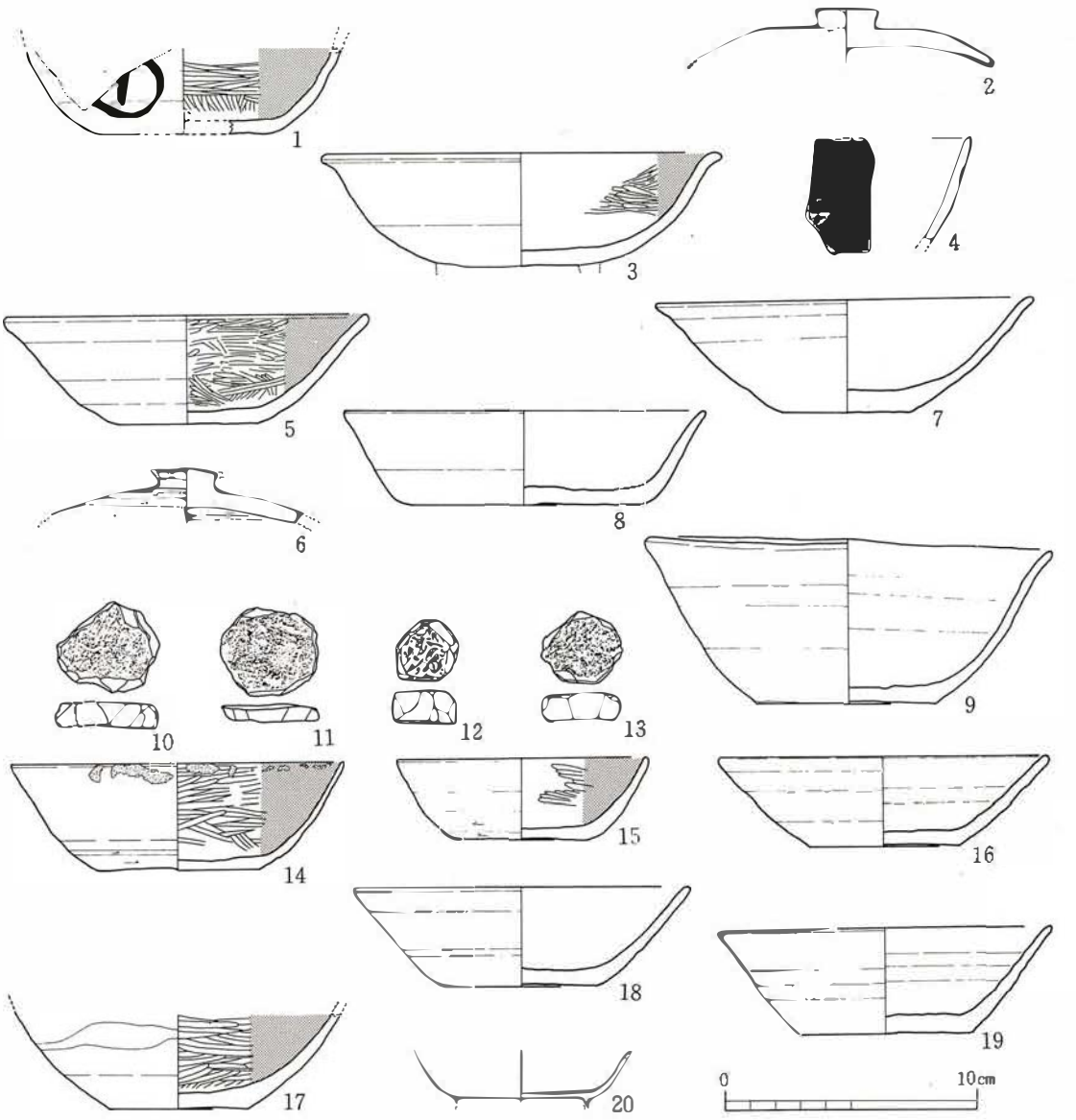
ＳＥ611：　調査区南端の中央、Ⅱ層上面で検出した。重複関係からＳＤ630より古い。ほぼ同じ位置でＳＥ611Ａ→ＳＥ611Ｂの作り替えが認められた。ＳＥ611Ａは掘り方のみが検出された。掘り方の平面形は不整円形で、径約３ｍを計る。井戸側についてはＳＢ611Ｂに壊されているため不明である。ＳＥ611Ｂは方形の木組み井戸側をもつ構造である。掘り方は隅丸方形で、一辺約２ｍを計る。井戸側は横板組みで、東西辺約１ｍ、南北辺 0.5m以上の寸法を計る。埋土は４層まで確認しており、４層が掘り方埋土、３層が井戸側内埋土である。掘り方埋土中には灰白色火山灰粒が認められた。遺物は掘り方埋土より土師器杯・高台付杯（第９図３）・甕、須恵器蓋（第９図２）・瓶・甕、赤焼き土器杯、丸瓦・平瓦の破片が出土している。土師器杯・甕はロクロ調整のものである。井戸側内埋土からは土師器杯（内、墨書土器２点）・甕、須恵器杯・瓶・甕（内、取手付甕１点〈第11図１〉）、赤焼き土器杯・高台付杯、灰釉陶器、丸瓦・平瓦の破片が出土している。土師器杯の底部は回転糸切り無調整である。



土層註記

1　2.5Y3/1　黒褐色　シルト　炭化物粒子、砂を含む
2　10YR3/1　黒　色　粘　土　炭化物含む
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　炭化物、地山粒子、わずかに砂を含む
4　10YR3/1　黒　色　粘　土　砂、地山ブロック、灰白火山灰粒子を含む　　掘り方

第８図　ＳＥ611Ａ・Ｂ実測図



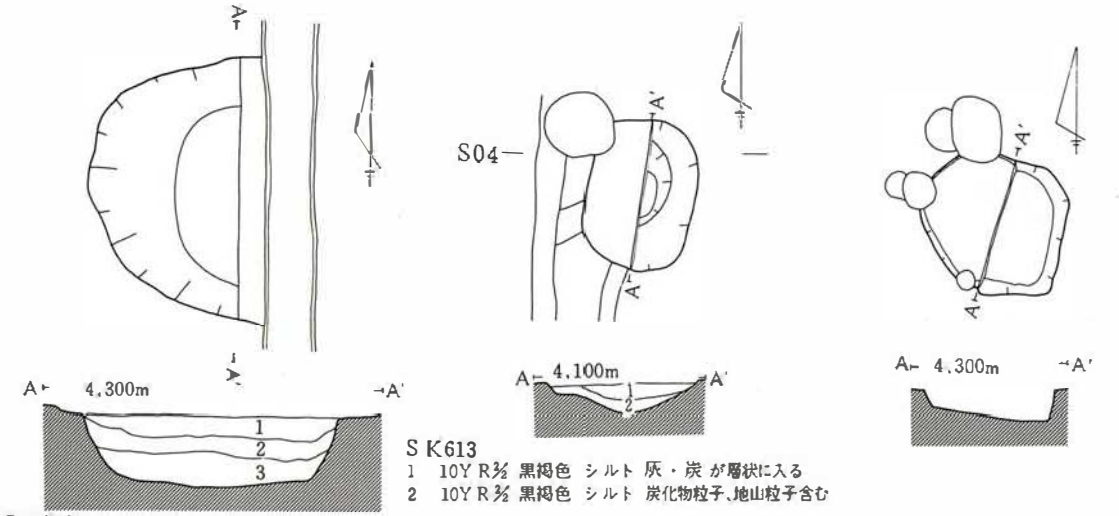
（単位cm）

番号	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	土師器	杯	SE611B 井戸側埋土	ヒクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/3		(6.5)		体部に刻書	R－04	4－7
2	須恵器	蓋	SE611B 掘方埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/3					R－09	
3	土師器	高台付杯	SE611B 掘方埋土	ロクロナデ、底部：ナデ	ヘラミガキ、黒色処理		(16.0)				R－22	4－3
4	土師器	杯	SE611B 掘方側埋土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	軟片				外面に刻書	R－05	4－8
5	土師器	杯	SK615埋土	ヒクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/3	(14.6)	(5.6)	4.3		R－03	
6	須恵器	杯	SK636埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	1/3	(14.4)	(9.4)	3.7		R－27	
7	須恵器	杯	SK637埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/3	15.0	5.0	4.5		R－02	4－5
8	須恵器	蓋	SK638埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ						R－10	
9	須恵器	杯	SK638埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ		16.2	7.0	6.7		R－01	4－4

図番号	種別	遺構層位	備考	図番号	種別	遺構層位	備考
10	円盤状土製品	SK613埋土	須恵器 蓋 ロクロナデ	11	円盤状土製品	SK614埋土	土師器 蓋 ヘラケズリ
12	円盤状土製品	SK637埋土	須恵器 蓋 タタキ	13	円盤状土製品	SK638埋土	須恵器 蓋 ロクロナデ

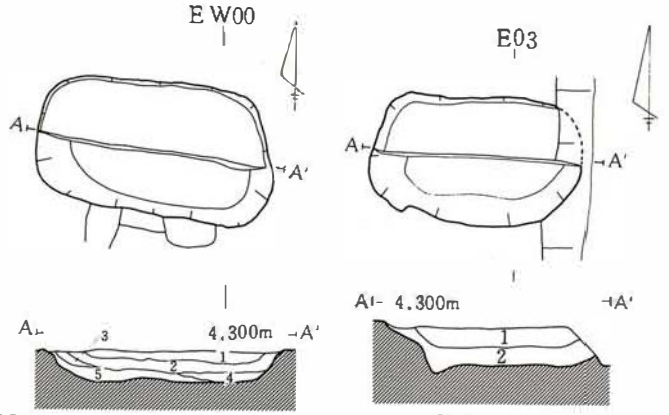
番号	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
14	土師器	杯	SD624埋土	ロクロナデ、底部：体部下端：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	ほぼ完形	13.3	6.4	4.2	内外面線部に沿い煙状遺物	R－11	
15	土師器	杯	SD624埋土	ロクロナデ、底部：静止糸切り のち回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	1/3	10.0	5.2	4.2		R－12	
16	須恵器	杯	SD627埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/3	13.2	5.9	3.6		R－16	
17	土師器	杯	SD629埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/3		5.6			R－14	4－1
18	未焼き土器	杯	SD629埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/3	(13.4)	6.0	3.9		R－13	4－6
19	須恵器	杯	SD629埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	1/3	(13.2)	6.8	4.2		R－15	
20	木製品	椀	SD629埋土					4.8		内外面未漆	R－1	

第９図　井戸跡・土坑・溝跡出土遺物実測図



S K612
1 10YR3/1 黒褐色 シルト 炭化物粒子、地山ブロック含む
2 10YR3/2 黒褐色 シルト 1層に近似するが粘性がある
3 2.5Y3/2 黒褐色 シルト 地山ブロックを多量に含み、固くしまっている

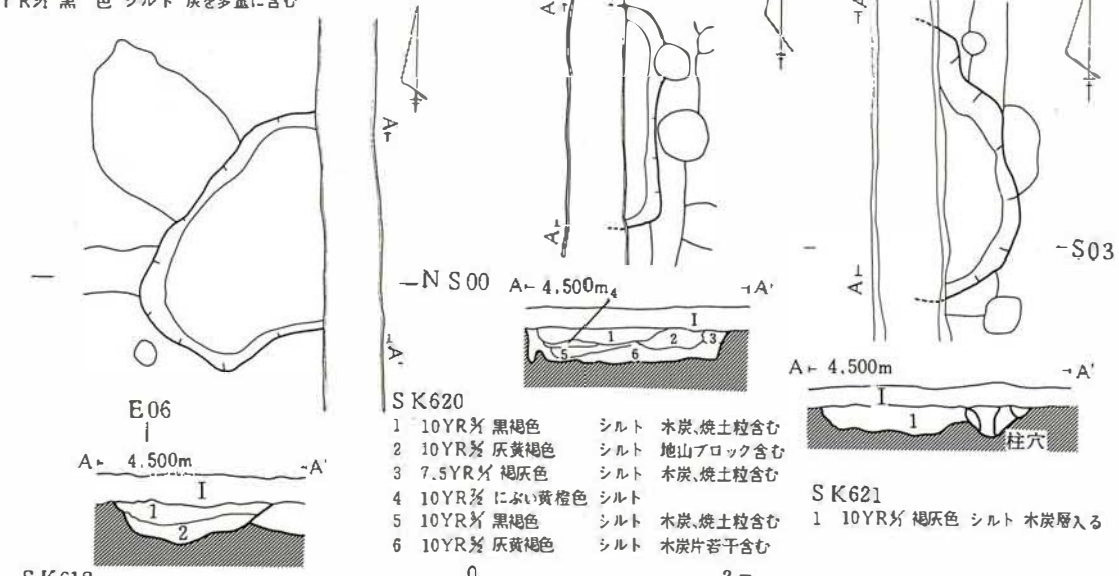
S K613
1 10YR3/2 黒褐色 シルト 灰・炭が層状に入る
2 10YR3/2 黒褐色 シルト 炭化物粒子、地山粒子含む



S K615
1 10YR3/2 黒褐色 シルト 炭化物ブロック、焼土粒子含む
2 10YR3/1 黒 色 シルト 炭、焼土ブロックを多量に含む
3 10YR3/3 黒褐色 シルト 炭化物を若干含む
4 10YR3/3 黒褐色 シルト 炭化物を若干含む
5 10YR3/1 黒 色 シルト 炭を多量に含む

S K616
1 10YR3/1 褐灰色 シルト 焼土粒、土器片 含む
2 10YR3/2灰黄褐色 シルト 地山粒含む

S K617
1 10YR5/6にぶい黄橙色 シルト 灰白色火山灰粒含む
2 10YR3/1 黒 色 シルト 炭化物層
3 10YR3/1 褐灰色 シルト 灰 層
4 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 若干炭化物含む



S K618
1 7.5YR3/3 明褐灰色 シルト 炭化物粒含む
2 7.5YR3/1 明褐灰色 シルト 炭化物粒含む

S K620
1 10YR3/1 黒褐色 シルト 木炭、焼土粒含む
2 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 地山ブロック含む
3 7.5YR3/1 褐灰色 シルト 木炭、焼土粒含む
4 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
5 10YR3/1 黒褐色 シルト 木炭、焼土粒含む
6 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 木炭片若干含む

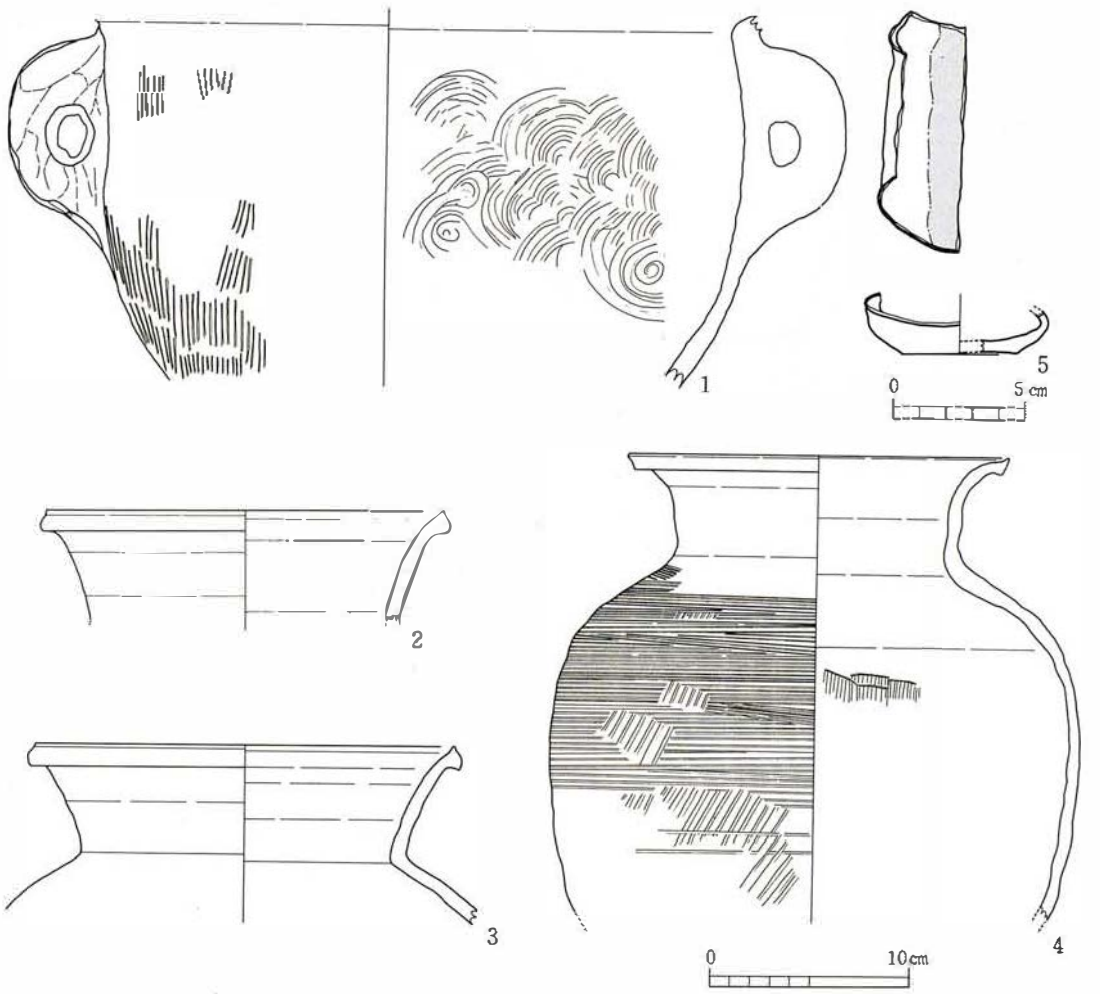
S K621
1 10YR3/1 褐灰色 シルト 木炭層入る

0 2m

第10図 土 壙 実 測 図

(3) 溝　　跡

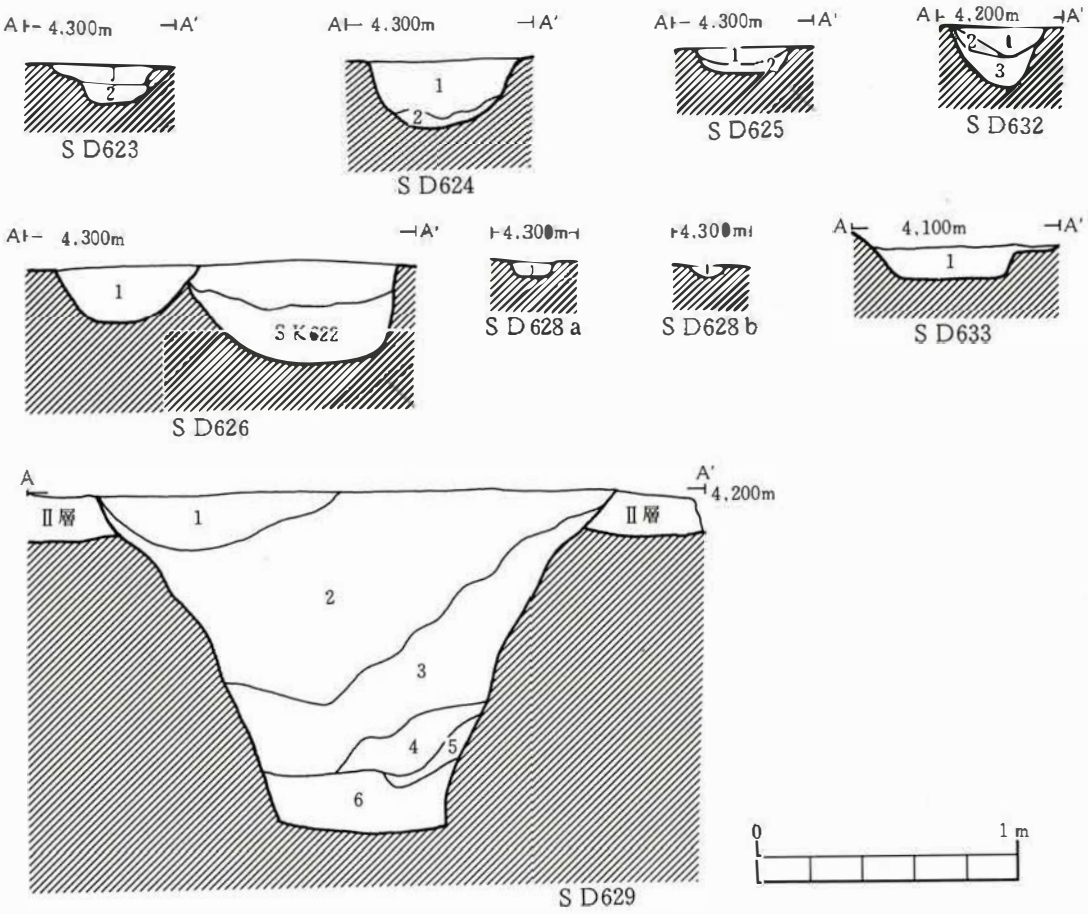
ＳＤ628（小溝群）：　調査区南半のほぼ全域、地山上面で検出した。重複関係のあるすべての建物跡、土坑より古い。本小溝群は細長く浅い溝が数本、南北および東西方向に並行して並ぶものである。溝は基本的に東西方向のものが古く、南北方向が新しい傾向がみられる。また南北方向のものの中でも重複が認められており、複数時期の変遷が想定される。規模は最も長いもので約８ｍ、幅10～40cm、深さ５～15cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕の破片が出土している。土師器杯はロクロ調整のものである。須恵器杯の底部には回転糸切り無調整のものとヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のものとがある。



（単位cm）

番号	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	須恵器	把手付甕	ＳＫ611Ｂ	ロクロナデ、平行叩き	同心円文当て具痕	体部					Ｒ－23	
2	須恵器	甕	ＳＫ621埋土	ロクロナデ	ロクロナデ		(20.0)				Ｒ－08	
3	須恵器	甕	ＳＫ621埋土	ロクロナデ	ロクロナデ		(20.8)				Ｒ－07	
4	須恵器	甕	ＳＫ638埋土	ロクロナデ、埋きの上からカキ目	ロクロナデ、ヘラナデ		(19.2)				Ｒ－06	4－12
5	灰釉陶器	耳皿	ＳＫ615埋土	ロクロナデ、底部に回転糸切り	ロクロナデ			(4.3)			Ｒ－02	4－10

第11図　土坑出土遺物実測図



土 層 註 記

S D623

1	2.5Y3/3	黒褐色	粘 土	地山ブロック含む
2	2.5Y3/3	黒褐色	シルト	地山ブロック多量に含む

S D624

1	10YR3/3	暗褐色	シルト	炭化物粒子含む
2	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山ブロック含む

S D625

1	2.5Y5/2	オリーブ褐色	シルト	
2	2.5Y5/4	オリーブ褐色	シルト	

S D626

1	2.5Y3/3	黒褐色	シルト	炭化物粒子、地山ブロック、砂含む
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	炭化物粒子、地山ブロック含む
3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	砂を主体とするが粘性がある

S D629

1	2.5Y7/4	浅黄色	シルト	褐色土と地山ブロックが混じる
2	2.5Y7/4	浅黄色	シルト	褐色土と地山ブロックが混じる
3	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	褐色粘質土主体（下層グライ化）
4	7.5GY5/1	緑褐色	シルト	褐色土と地山ブロックが混じる（グライ化）
5	10GY7/1	明緑灰色	砂質シルト	粘質土と砂質土が互層になる（グライ化）
6	10GY5/1	明緑灰色	シルト	黒色粘質土ブロックが入る（グライ化）

S D628 a

1	10YR5/1	褐灰色	シルト	

S D628 b

1	10YR5/1	褐灰色	シルト	

S D633

1	10YR3/3	黒褐色	シルト	炭化物粒子含む、固くしまっている
2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	地山ブロック含む
3	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	地山ブロック含む、若干粘性有り

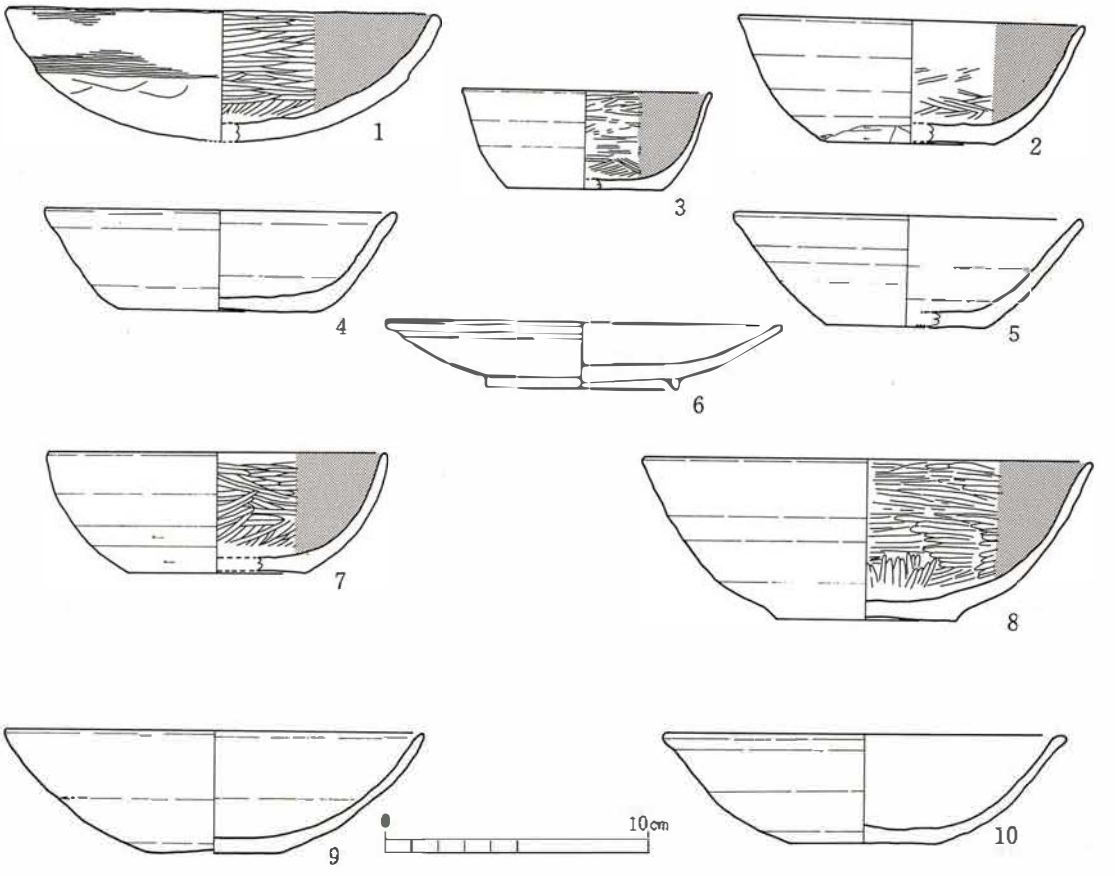
S D634

1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	炭化物粒子を含む、粘性有り
2	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック、炭化物粒子含む
3	10YR3/3	暗褐色	シルト	地山ブロック含む

第12図 溝跡断面図

(4) その他の遺物

この他に基本層位（Ⅰ層～Ⅱ層）、ピットなどから遺物が出土している。第Ⅰ層（表土）からは古代の土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器の他に、近世以降の土器（灯明皿）、陶磁器の破片が出土している。第Ⅱ層からは、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶・甕、赤焼き土器杯、円盤状土製品、鉄釘、鉄滓が出土している。（第13図１～６）。土師器杯・甕にはロクロ調整と非ロクロ調整のものとがあり、前者が大半を占めている。ロクロ調整の杯はすべて内黒で、底部の特徴には回転糸切り無調整、回転ヘラ削り調整、手持ちヘラケズリ調整がみられる。このうち回転糸切り無調整のものが量的には多い。須恵器杯の底部には回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがある。このうち回転糸切り無調整



（単位cm）

番号	種別	器種	遺構層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	実測図
1	土師器	杯	L－Ⅱ	口縁～体部：ヨコナデ 体部下半～底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理		16.4		4.9		R－50	
2	土師器	杯	L－Ⅱ	体部：ロクロナデ 体部下半：ヘラケズリ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/2	(13.2)	(6.2)	(4.7)		R－37	
3	土師器	杯	L－Ⅱ	ロクロナデ、底部：ナデ	ヘラミガキ、黒色処理	1/2	(9.7)	(5.9)	3.7		R－38	4－2
4	須恵器	杯	L－Ⅱ	ロクロナデ、底部：ナデ	ロクロナデ	1/2	(13.4)	(7.4)	3.8		R－36	
5	須恵器	杯	L－Ⅱ	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/2	(13.2)	(6.0)	4.1		R－35	
6	灰釉陶器	椀	L－Ⅱ	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/2	(15.0)	(7.3)	2.6		R－01	4－11
7	土師器	杯	Pit 151埋土	体部：ロクロナデ、体部下半：回転ヘラケズリ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/2	(12.9)	(6.6)	4.5		R－26	
8	土師器	杯	Pit 129埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	1/2	(17.0)	6.8	6.0		R－20	
9	赤焼き土器	杯	Pit 132埋土	ロクロナデ 底部：回転糸切りのちヘラケズリ	ロクロナデ	3/5	(15.6)	4.8	4.6	全面にうすくすべ一度付着	R－24	
10	須恵器	杯	Pit 129埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	3/5	(15.3)	2.8	4.1		R－25	

第13図　第Ⅱ層・ピット出土遺物実測図

第1表　溝跡の概要

遺構名	検出面	重複関係	方向	長さ×幅×深さ(m)	遺物	埋土の特徴・備考
SD623	地山	SD624→SD623　※SB601新旧不明	東西	3.3×0.68×0.35	土師器杯・高台付杯・甕（ロクロ調整）、須恵器杯（回転糸切り無調整）・甕	2層に分けられ1層中に灰白色火山灰粒を含む
SD624	〃	SD624→SD623ピット　※SB601新旧不明	北西→南東	4.5×0.4×0.14	土師器杯、須恵器杯（回転ヘラケズリ・第9図14・15）	黒褐色シルト質粘土が主体で、地山ブロックを多量に含む
SD625	〃	※SB601新旧不明	東西	3.73×0.4×0.2	土師器杯・甕	2層に分けられるがオリーブ褐色シルト主体
SD626	〃	SK622→SD626→ピット	南北	3.8×0.58×0.22	土師器杯・甕（ロクロ調整）、須恵器杯・瓶	黒褐色砂質シルトの単層
SD627	〃	なし	〃	5.2×0.7×—	土師器杯（回転糸切り無調整・ヘラ切り→ナデ・回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ）・甕、須恵器杯（回転糸切り無調整・第9図16）・甕	土器片を多く含む
SD629	Ⅱ層	SB・SD・SK・ピット→SD629	N→E	33×2(上場)×0.65(下場)×1.3	土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、赤焼き土器杯、緑釉陶器、丸・平瓦、深器椀（第9図20）、土製カマド、鉄釘、砥石	褐色シルトと地山ブロックが混じる土層で西側より一手に埋め戻されている
SD630	〃	SE611→SD630	東西	9×2.3(上場)×同上	遺物はSD629に連続する同時期の遺構とみられることから、SD629のものとして一括して取り上げた	SD629と調査区南端で逆L字状に接続する
SD631	〃	SD629→SD631	〃	5.5×3.5×1.35	土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、赤焼き土器杯	大きく2層に分けられ1a～1b層が人為的埋め戻し、2層が自然堆積土

第2表　土坑の概要

遺構名	検出面	重複関係	平面形	長軸×短軸×深さ(m)	遺物	埋土の特徴・備考
SK612	Ⅱ層	なし	(不整楕円形)	径約2×0.6×—	土師器杯（回転糸切り無調整）・甕・瓶、赤焼き土器杯、須恵器杯（回転糸切り無調整・回転ヘラケズリ）・甕	1～2層が自然堆積、3層が人為的埋戻し
SK613	地山	SD628ピット→SK613→ピット	隅丸長方形	1.15×0.82×0.25	土師器杯・甕（ロクロ調整）、須恵器瓶、赤焼き土器杯、円盤状土製品（第9図10）	炭が互層に入る自然堆積
SK614	〃	SD628→SK614→SB605	不整方形	1.1×1.0×0.23	土師器杯・甕（ロクロ調整）、須恵器杯（回転糸切り無調整）・瓶・甕、円盤状土製品（第9図11）	黒色シルトの自然堆積
SK615	〃	SD628ピット→SK615	隅丸長方形	1.8×1.02×0.22	土師器杯（回転糸切り無調整・手持ちヘラケズリ）・甕、須恵器杯（手持ちヘラケズリ）、赤焼き土器杯、灰釉陶器耳皿（第11図5）	5層に分けられるが主体は黒色系のシルト
SK616	〃	ピット→SK616→SD629	隅丸方形	1.6×1.0×0.38	土師器杯・甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）、須恵器杯（回転糸切り無調整・ヘラ切り→ナデ）・蓋・甕	2層に分けられ1層中に焼土粒を含む
SK617	〃	SB602→SK617	不整楕円形	1.43×0.9×0.15	土師器杯（ロクロ調整・非ロクロ調整）・甕、須恵器杯（手持ちヘラケズリ）・甕、炭化米	4層に分けられ1層中に灰白色火山灰粒を含む
SK618	〃	SK SD→SK618	不整形	2m以上×1.7×0.3	土師器杯・甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）・甕、須恵器杯（ヘラ切り→手持ちヘラケズリ）・甕	2層に分けられるが明褐色シルト主体
SK619	〃	SD629 SK→SK619	不明	不明	土師器杯・甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）、須恵器杯・甕	灰黄褐色シルトの単層で人為的に埋め戻されている
SK620	〃	SD628→SK620　※SB606 SB607新旧不明	(方形)	南北で1.55m×0.4	土師器杯・甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）、須恵器杯（回転糸切り無調整・ヘラ切り→ナデ）・甕	黒褐色系のシルトと黄褐色シルトが互層になる自然堆積
SK621	〃	SD628ピット→SK621	不整形	—×0.23	土師器杯（回転糸切り無調整・回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ）・甕須恵器杯（ヘラ切り→ナデ・回転ヘラケズリ）・甕（第11図2・3）	褐灰色シルトの単層
SK622	〃	SK622→SD626	隅丸方形	一辺0.8m×0.4	土師器甕（ロクロ調整・非ロクロ調整）、須恵器甕	2層に分けられるが暗オリーブ褐色シルト主体

のものが量的に多い。また、赤焼き土器は全体の構成比からみると割合は少ない。ピットから出土した遺物のうち、図化できたのは土師器杯、須恵器杯、赤焼き土器杯の4点である（第13図7～10）。

4 小　結

今回の調査区からは掘立柱建物跡10棟、井戸跡1基、溝跡、土坑、その他ピット多数を検出し、遺構が非常に濃密に分布する地区であることが判明した。これらの遺構は堆積層（第Ⅱ層）などを介して複雑に重複していたが、基本的には古い順にSD628小溝群→掘立柱建物跡・井戸跡・土坑→SD629・630・631と変遷していることが知られた（これらを仮にⅠ期→Ⅱ期→Ⅲ期とする）。

Ⅰ期遺構群は、地山上面で検出し、調査区の南半に分布する小溝群である。重複関係から他の遺構すべてに切られる。南北方向のものと、これにほぼ直交する東西方向のものとがある。小溝群内での切り合い関係は東西方向が古く、南北方向が新しい傾向にあるが、3時期以上の重複がみられる部分もあり、複数時期の変遷が予想される。方向は発掘基準線にほぼ沿う。長さは各溝によって一様ではないが、最長で約8mを計る。溝と溝の間隔は約0.8mである。

Ⅱ期遺構群は、ほとんどが地山上で検出されるものである。しかしⅡ層が堆積する調査区南端ではⅡ層上面で検出されるものと、Ⅱ層におおわれ地山上面で検出されるものとがある。前者にはSB606・607、SE611A・B、SK612があり、後者にはSB609・610、SK613・638がある。このうちⅡ層上面で検出されるSE611Aの掘り方埋土には10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰粒(註1)が含まれている。また、Ⅱ層中にも同火山灰粒が含まれており、Ⅱ層の堆積は火山灰降下以降の時期であることがわかる。この他、地山上面で検出した遺構中にも灰白色火山灰粒が含まれるものがある（SB602、SD623）。

建物跡は、柱穴の規模が小さいもの（一辺20cm）から大きいもの（一辺80cm）まで多様である。方向は座標北に沿うものが多いが、若干東に振れるもの（SB609D）や、25度東に振れるもの（SB600）もみられる。これらの建物跡は、本期に属する土坑、溝と重複関係にあるがその新旧関係がとらえられたものは少ない。したがって、本期はさらに小期に分けられるものと思われるが、遺構のセット関係を把握することはむずかしい。

Ⅲ期の遺構には、Ⅱ層上面で検出した逆L字状に屈曲する溝（SD629・630）とこれより古いSD631が該当する。これらは、Ⅱ期の遺構すべてを切って構築しており、今回検出した遺構の中で一番新しい。両者とも埋土が一手に埋め戻されているのが特徴である。

次に各期の年代について考えてみる。まずⅡ期の遺構のうち灰白色火山灰粒が埋土中に含ま

れているものについては10世紀前半以降の年代が考えられる。これは、これら遺構の埋土中に赤焼き土器（註２）が含まれていることとも矛盾しない。この他、灰白色火山灰粒が含まれない建物跡、土坑、溝については、ロクロ調整の土師器が含まれていることより、大きくは平安時代に属する。このうち、さらに細かく年代を推定できる遺構としては、ＳＫ612・613・615 がある。これらの遺構からは赤焼き土器が出土しており、10世紀前半以降の年代が考えられる。この他、ＳＢ609Ａ～Ｄまでには、土師器杯がロクロ調整で回転糸切り無調整のものと、再調整を施したものとが出土している。須恵器杯にな回転糸切り無調整とヘラ切りのものとがある。赤焼き土器は含まれていない。このような内容の土器群は、多賀城跡のＤ群土器の様相に類似する。Ｄ群土器については９世紀後半代考えられており、本遺構には、この年代を当てておきたい。

Ⅰ期の遺構から出土した土師器は、いずれも破片であり、詳しくは検討できないが、いずれもロクロ調整であることから、国分寺下層式（奈良時代）までは、さかのぼらないものと思われる。そして、９世紀後半代と考えられるＳＢ609Ａ～Ｄより古いことから、９世紀前半代と推定される。

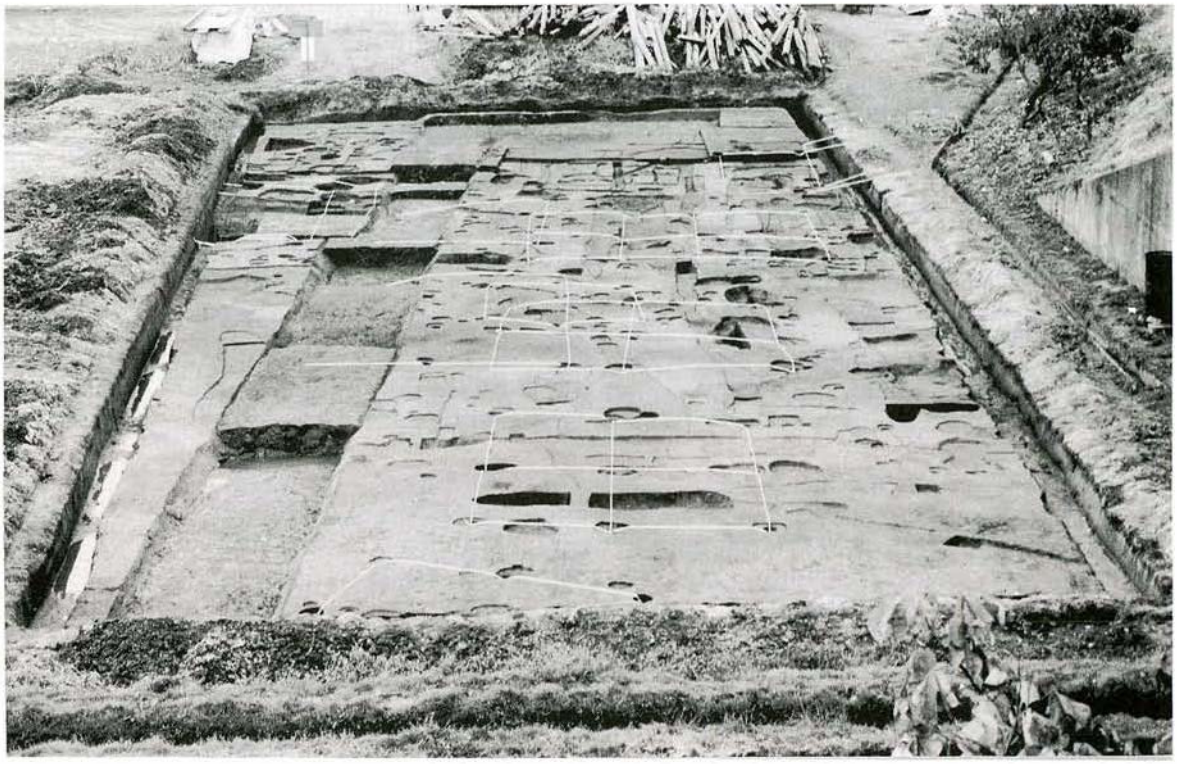
Ⅲ期の遺構から出土した遺物は、すべて奈良・平安時代のものである。しかし、これらの遺物はすべて一手に埋め戻された埋土に含まれていたものであり、本地区の古代の遺構の密集度からすれば、前代のものが混入している可能性は高いと思われる。さて、このような方形を区画するような大規模な溝は、多賀城周辺では、中世に入ってから出現しており、屋敷をかこむものとされている（註３）。本地区検出の溝跡についても、同様な年代、性格を考えておきたい。なお、本期の溝跡と直接切り合いがなく、小規模な柱穴をもつＳＢ604・606・607・608については、一応Ⅱ期に入れておいたが、本期に属する可能性もあろう。

〈註〉

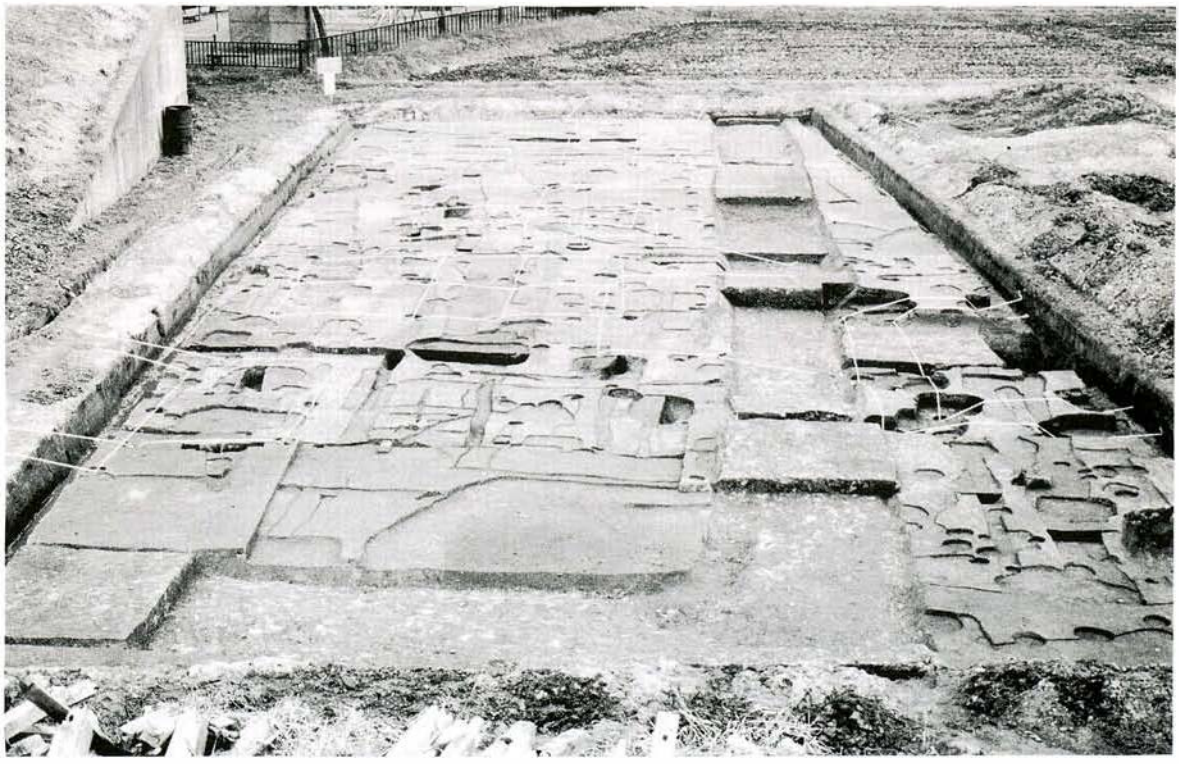
1　白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所

2　多賀城跡・政庁跡本文編（1982）によれば須恵系土器は10世紀以降に出現するものと考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、この須恵系土器と同様のものとみている。

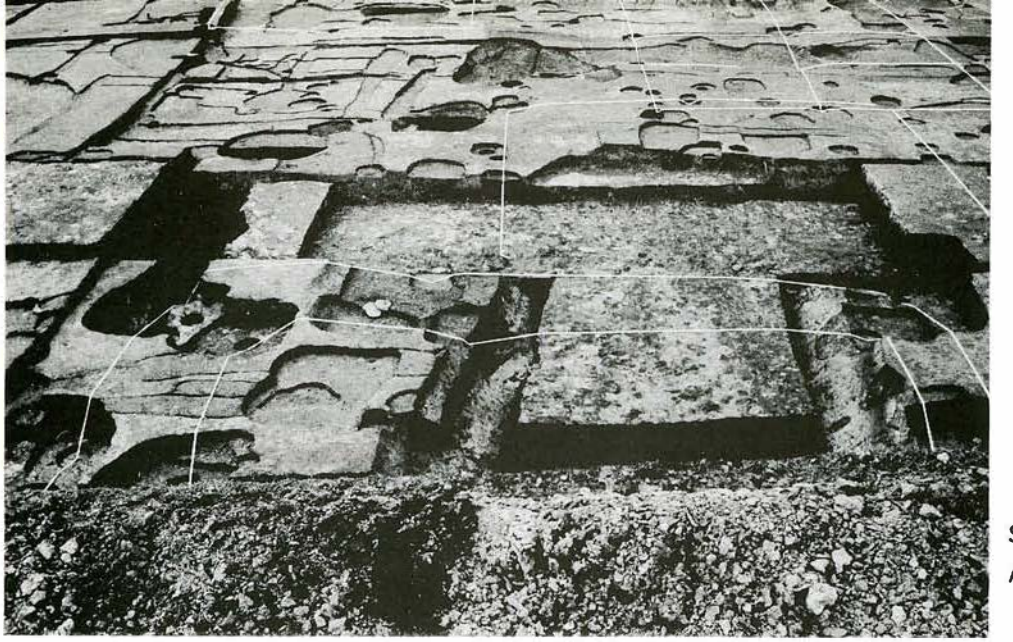
3　多賀城市教育委員会（1987）：「年報１．新田遺跡第５次調査」『多賀城市文化財調査報告書』第14集
〃　（1988）：「年報２．〃　第６次調査」『〃』第16集
多賀城市埋蔵文化財調査センター（1989）：「年報３．新田遺跡第７・８次調査」
『多賀城市文化財調査報告書』第20集
赤澤靖章（1990）：「山王遺跡―仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第138集　宮城県教育委員会
千葉・石本（1991）：「山王遺跡―第10次発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第27集
多賀城市埋蔵文化財調査センター



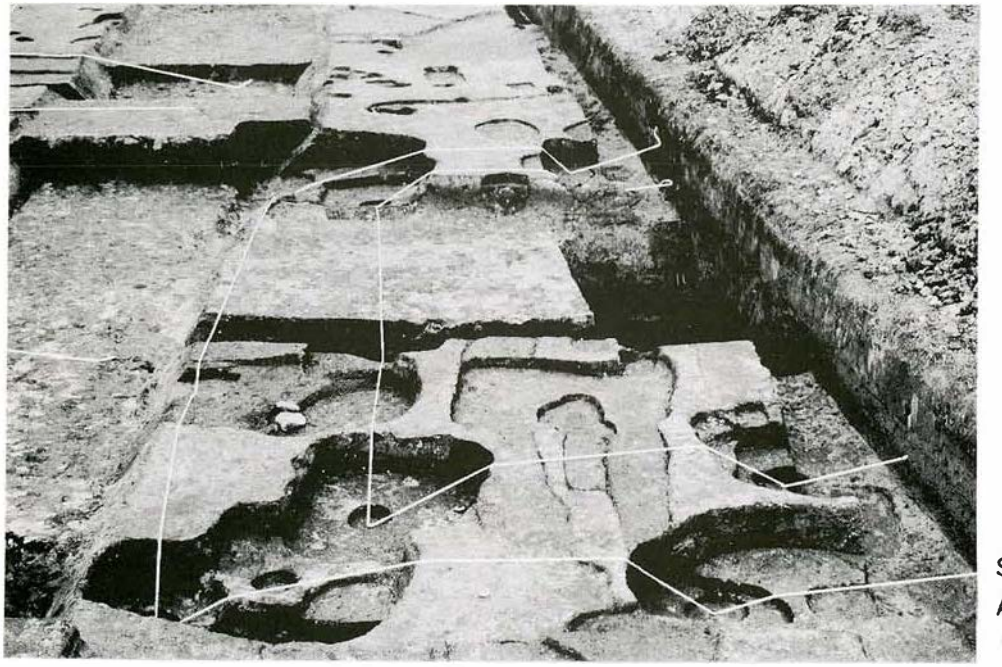
調査区全景（北より）



調査区全景（南より）

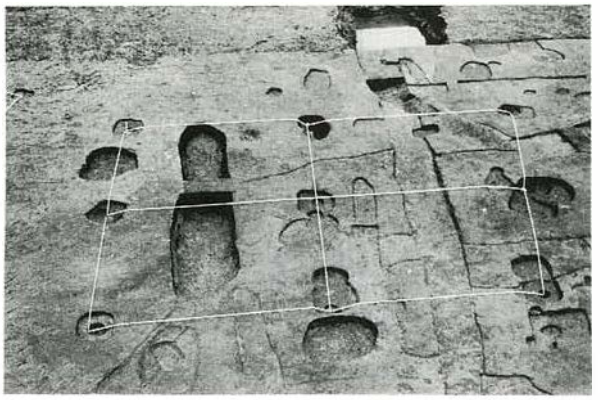


SB609建物跡
A～D（東より）

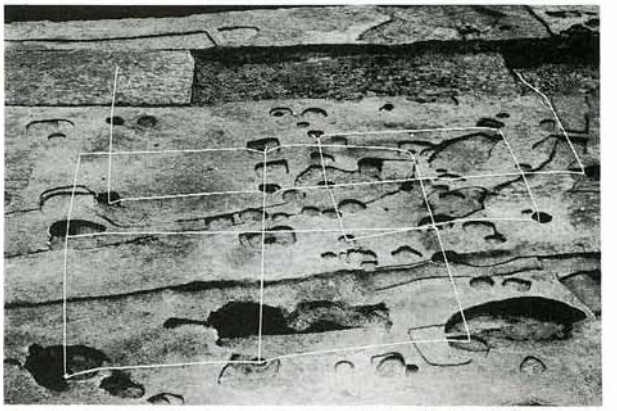


SB609建物跡
A～D（南より）

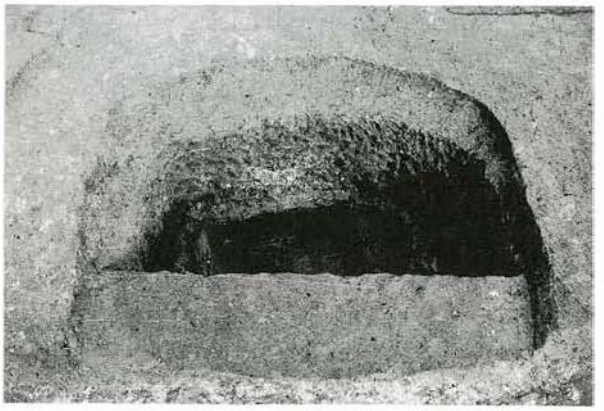
SB609建物跡
A～D南西隅柱穴
断面（南より）



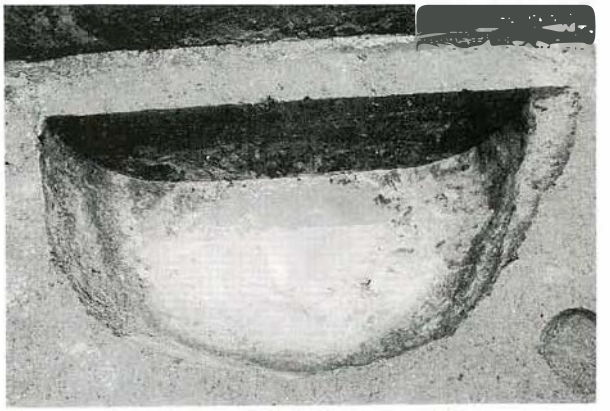
ＳＢ601建物跡（西より）



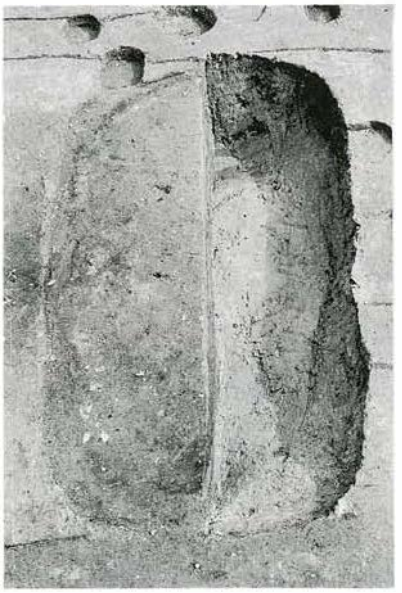
ＳＢ602・603・604建物跡（西より）



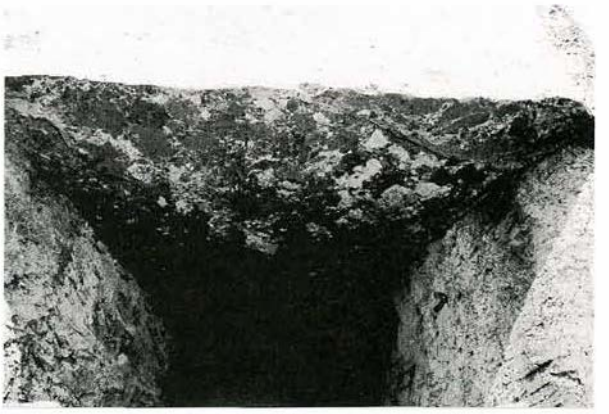
ＳＥ611Ａ・Ｂ井戸跡（南より）



ＳＫ612土坑（西より）



ＳＫ615土坑（西より）

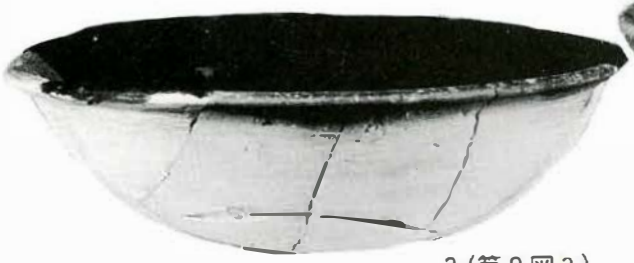


ＳＤ629溝跡断面（北より）

ＳＤ631溝跡断面（南西より）

1（第９図17）

2（第13図３）



3（第９図３）

4（第９図９）

5（第９図７）

6（第９図18）

7（第９図１）

8（第９図４）

9（第７図３）

10（第11図５）

11（第13図６）

12（第11図４）

出　土　遺　物

Ⅴ　山王遺跡第９次調査関連遺構確認調査のまとめ

平成２年より開始した山王遺跡第９次調査の関連調査は、平成２年度で１ケ所、平成３年度で４ケ所行った。関連調査は第９次調査で発見された「国守の館」跡とみられる遺構とその周辺部の遺構を比較検討し、国守の館全体の範囲を明らかにすることに主眼を置いて、遺構確認調査として実施した。

今回実施した各調査次毎の調査成果については、それぞれ小結に述べたとおりであるが、ここでは第９次調査に関連する平安時代の遺構を中心に総括する。

第11次調査では、掘立柱建物跡５棟を検出した。このうちの１棟は東西２間、南北１間以上の建物跡で比較的規模が大きい柱穴をもつものである。

第13次調査では、掘立柱建物跡１棟、道路跡３条を検出した。掘立柱建物跡は一辺１ｍの柱穴をもつ大規模な建物跡で、方向は座標北に沿うものである。道路跡は部分的に検出したものであるが、東西・南北方向のものがみられる。路幅は２ｍ前後のものと、４ｍ前後のものとがある。南北道路は灰白色火山灰を挟んで２時期の変遷が認められたが、東西道路では１時期のみである。東西道路の方向は東で南に約４度振れている。

第14次調査は湿地的状況が強く、遺構・遺物とも検出されなかった。

第15次調査では、東側に隣接する仙塩道路関連調査区で検出されている東西道路の延長部分を検出し、さらにその道路とＴ字状に接続して南へ延びる南北道路を発見した。

第16次調査では、２間×２間の倉庫跡２棟と、南北３間×東西２間以上の大規模な建物跡１棟を発見した。前者の方向は座標北にほぼ沿うが、後者は北で東に約４度振れている。また、この建物跡に先行して小溝群（畑跡）を検出した。

次に、関連調査で検出した道路跡について検討する。第15次調査で検出した東西道路は、仙塩道路関連調査区で検出されているＳＸ299東西道路跡に連続することは、位置及び方位からみて間違いないものと思われる。そして、Ｔ字状に接続する南北道路とＳＸ299道路跡に交差するＳＸ400・515南北道路までの距離は約130mを計る。これまでの周辺調査で南北道路間の距離が確実に測定できたものとしては、仙塩道路調査区内で検出した２本の南北道路がある。この道路間の距離は、約１町（109m）に当たる。今回第13次と第15次で検出した南北道路の間隔もほぼ１町に当たるが、他に１町区画そわないものも数例発見されてきている。これは第８次調査区で検出された南北道路にもあてはまる。

さらに、第13次調査区でも東西・南北の道路が検出されたことから、幅12mの東西道路の南側一帯にも地割りの存在が考えられる。このような調査の結果から、第９次調査区は第13次と第15次で検出した南北道路の区割りの中に位置していることから、この道路跡は、「国守の館」の

西辺と東辺を区画するものと推察される。

第16次調査では9世紀前半代の畑跡と考えられる小溝群を検出しており、これは第9次調査のA1期段階の小溝群とほぼ年代を同じくするもので、両地区は同じ時期に畑地として利用されていたことが知られる。

以上のこととこれまでの調査成果から、多賀城跡南面には外郭南辺築地の方位を範とした幅12mの東西道路が通っており、その周辺には東西・南北の道路による方格地割りがなされていたことを指摘できる。これらの道路の間隔については、1町を単位としているものもあるが、明らかにその区割りにそわないものもあり、なお検討が必要である。

また、方格地割り内には掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡などが配置されており、宅地内における土地利用のあり方が具体的に把握できるようになってきている。このような都市計画的な整備が行われるようになるのは平安時代に入ってからである。

一般的に平安時代の集落跡では竪穴住居跡が主体となっており、この点からすればこれまで述べてきたような第9次調査区周辺の遺構のあり方は一般的な集落跡とは区別されるものと考えられる。しかも、ここから出土する遺物には、一般集落跡からはほとんど出土しない青磁、白磁、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、石帯、木簡、漆紙文書などが多く発見されている。

これらのことから第9次調査区周辺には官人層と結びつく屋敷跡が広く展開していたものと推察される。このような周辺の様相より、第9次調査区は幅12mのSX382 東西道路の北側に面した方格地割り内に位置しているものと考えられる。そして第13次調査と第15次調査の成果を踏まえれば、1町を基調とした敷地を有していた可能性が考えられる。

〈引用・参考文献〉

高倉敏明・石川俊英・千葉孝弥（1986）：「山王遺跡―昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ」『多賀城市文化財調査報告書』第10集　多賀城市教育委員会

相沢清利（1990）：「山王遺跡―第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

赤澤靖章（1990）：「山王遺跡―仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13第138集　宮城県教育委員会

石川俊英・相沢清利（1991）：「山王遺跡―第9次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第24集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

菅原弘樹・佐藤則之（1991）：「山王遺跡―仙塩道路建設関係遺跡平成2年度発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会

千葉孝弥・石本　敬（1991）：「山王遺跡―第10次発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第27集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

Ⅵ　西沢遺跡第１次調査

1　調査に至る経緯

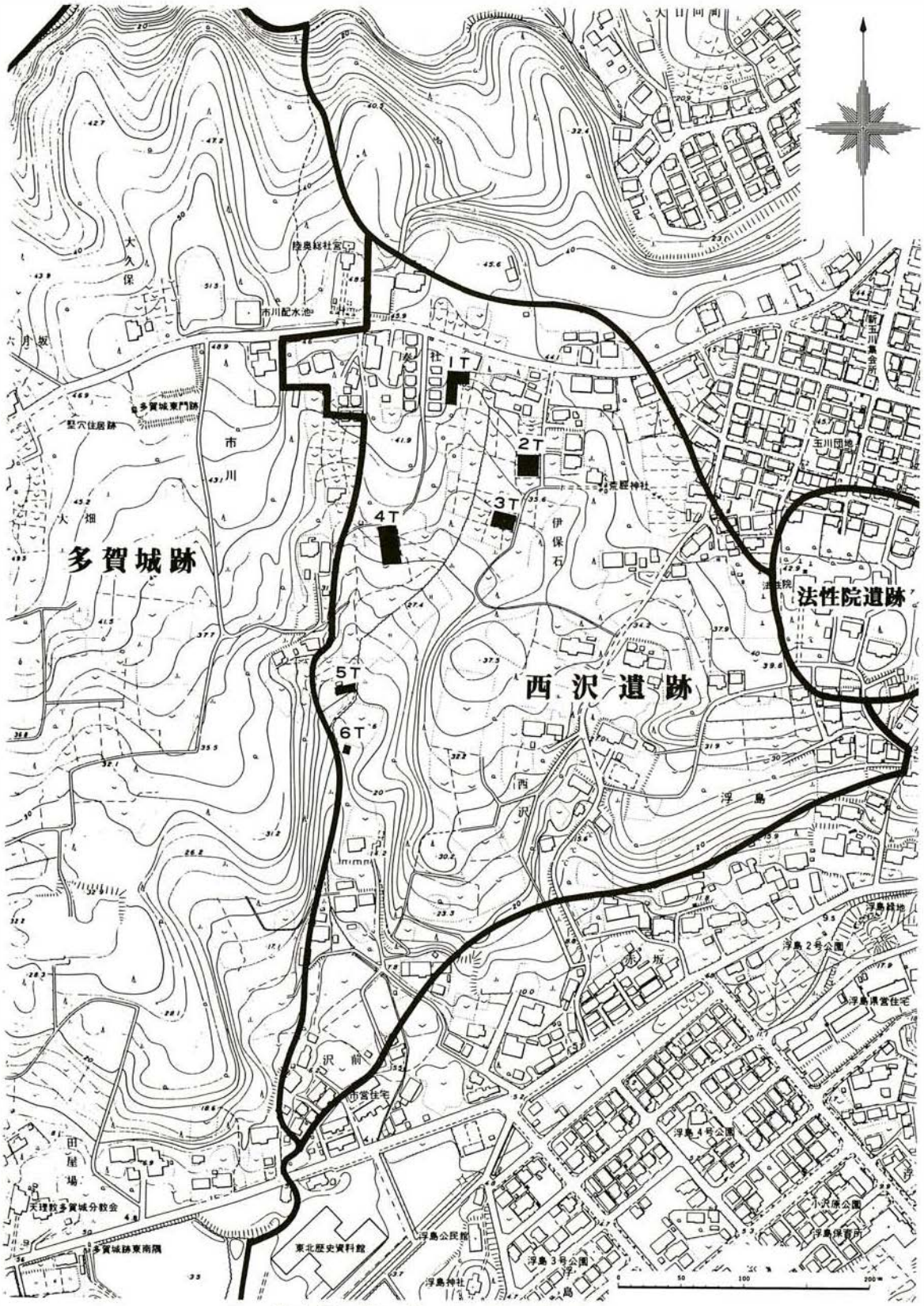
本調査については、平成２年９月に伊保石地区の地権者代表佐藤忠寿、佐藤玉治の両氏より約10万㎡を対象とした伊保石地区の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、当市教育委員会文化財係に照会があった。これについて当市教育委員会では、多賀城跡の東側に隣接する西沢遺跡の包蔵地内に含まれていることから発掘調査が必要であり、また、対象面積が約10万㎡にもおよぶため調査費用、日程の積算のため試掘調査を実施されたい旨の回答をおこなった。その後、申請者より試掘調査の依頼があり、当埋文センターと市教育委員会との間で調査日程等の協議を行い、平成２年10月22日より調査を開始することとなった。

2　西沢遺跡の立地と歴史的環境

西沢遺跡は、多賀城跡の北東部に隣接する場所に位置し、東西450m、南北700mの範囲にわたっている。遺跡が立地する丘陵は、陸前丘陵のひとつである松島丘陵から派生し、塩釜市方面から西へ延び、多賀城市北部に達して終わる標高約50～60mの低丘陵である。そして、この低丘陵の南面には広大な沖積平野（仙台平野）が広がっている。本遺跡はこの沖積平野と接する松島丘陵南西端に立地し、大小の谷間が複雑に入り組んだ地形環境の中にある。標高は北端の高いところで約46m、南端の低いところで約６ｍを計る。調査地点は丘陵の南向き緩斜面の平坦面と沢が入り込む谷部を対象とした。

次に本遺跡の周辺に所在する遺跡についてみると、前述の陸奥国府・特別史跡多賀城跡が西側に接する形で位置している。また、東側には奈良・平安時代の法性院遺跡、高原遺跡が所在している。多賀城跡の東面一帯については、これまで本格的な発掘調査が実施されておらず、その詳細については不明であった。しかし、当センターでは近年数ケ所で試掘調査を実施しており、その成果についてまとめておく。平成元年10月に実施した本遺跡南端に隣接する市営住宅建て替えに伴う調査では、現地表下約1.2ｍのところで灰白色火山灰層とその下層からスクモの自然堆積層が検出され、古代においては湿地になっていたことが判明した。平成２年６月に実施した本遺跡のほぼ中央付近、丘陵部南緩斜面の宅地造成に伴う試掘調査では、掘立柱建物跡、溝跡、土坑を検出し、丘陵部に古代の遺構が確実に存在することが確認された。この他に高原遺跡において、昭和63年３月に試掘調査を実施しているが、遺構、遺物とも検出されなかった。

また、多賀城跡に関連する歴史的環境を考える上で重要なものとして、本遺跡の北端付近に


多賀城跡
西沢遺跡
法性院遺跡
1T
2T
3T
4T
5T
6T
陸奥総社宮
市川配水池
多賀城東門跡
竪穴住居跡
大久保
大畑
市川
伊保石
西沢
浮島
赤坂
沢前
田屋場
天理教多賀城分教会
多賀城跡東南隅
東北歴史資料館
浮島公民館
浮島神社
浮島3号公園
浮島4号公園
浮島2号公園
浮島県営住宅
浮島緑地
小沢原公園
浮島保育所
玉川団地
法性院
荒脛神社
0
50
100
200m

第1図 調 査 区 位 置 図

位置する陸奥国総社とされている奏社宮、さらに、この東約2.5㎞に位置する奥州一の宮塩釜神社があげられる。そして本遺跡は多賀城の東門を通って塩釜に通じる旧街道沿いに位置しているものと考えられる。

3　調査の方法

今回の試掘調査は対象面積が約10万㎡と広大な面積を有することや、調査の費用、日程、作物の作付けの状況により、トレンチの数を限定して設定することとなった。トレンチの設定は当地区の地形を勘案して、丘陵南緩斜面と沢が入り込む谷部に設定した。前者は竪穴住居跡等の遺構有無の確認、後者は谷部の土層堆積状況や、遺物の混入率の把握を目的とした。トレンチは、６ケ所設定し、北から順に第１～６と番号を付けた。

調査は10月22日の第５トレンチ（以下Tと略す）より開始し、基本的に第5･6→1･3→2･4の順に進めていった。表土は各トレンチともバックホーで剥ぎ、その後順次作業員が入り精査を行った。第５Tは、谷部に位置し３m×13mの東西方向に設定した。第６Tは第５Tより南に40mほどいった地点で、谷部の東縁辺に位置する南緩斜面平担部である。トレンチは４m×７mの南北方向に設定した。第１Tは谷部に位置し、多賀城跡の東門から東に延びていたと推定される道路跡の検出も一つの目的とした。24m×６mに南北方向に設定し、その後北側を東方へ拡張した。第３Tは南緩斜面平担部に位置し、12m×18mの東西方向に設定した。第２Tは第３Tより北に30mほどいった地点で、南緩斜面平担部に位置する。トレンチは18m×16mの南北方向に設定した。第４Tは南緩斜面平担部に位置し、34m×14mの南北方向に設定した。調査区は後世の削平により２段にわたって段差が付けられており、削平が著しいとみられた。

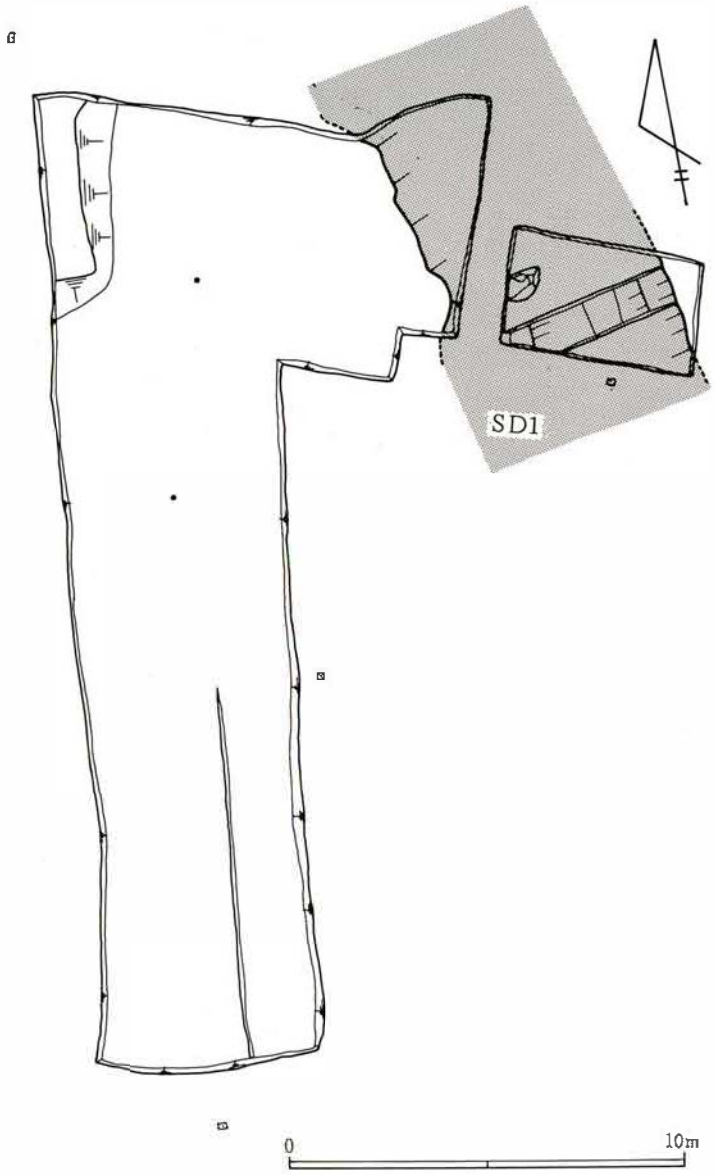
4　調査成果

〈第１トレンチ〉

本トレンチ内の堆積層は、表土（Ⅰ層）が約70cm、Ⅱ層～Ⅶ層が40～80cmの厚さで地山の傾斜にそって自然堆積していた。Ⅱ・Ⅲ層は調査区南端付近に、Ⅳ～Ⅶ層が調査区南半の全域に分布していた。この各堆積層の上面では遺構は検出されず、また遺物も土師器・瓦片が数点出土したのみである。地山上面では、調査区北側の東側拡張区において、南北方向の溝跡（ＳＤ１）を検出した。確認した長さは約９mで、幅約６m、深さ0.8mを計る。埋土は４層に分層されたが、主体となっているのは黒褐色シルトである。遺物は２・３層から出土しており、赤焼土器杯、須恵器瓶・甕、カワラケ（第６図1～2）の破片がみられる。

〈第２トレンチ〉

本トレンチ内堆積層は、表土（Ⅰ層）が約15cmでその下が地山で遺構検出面となっている。



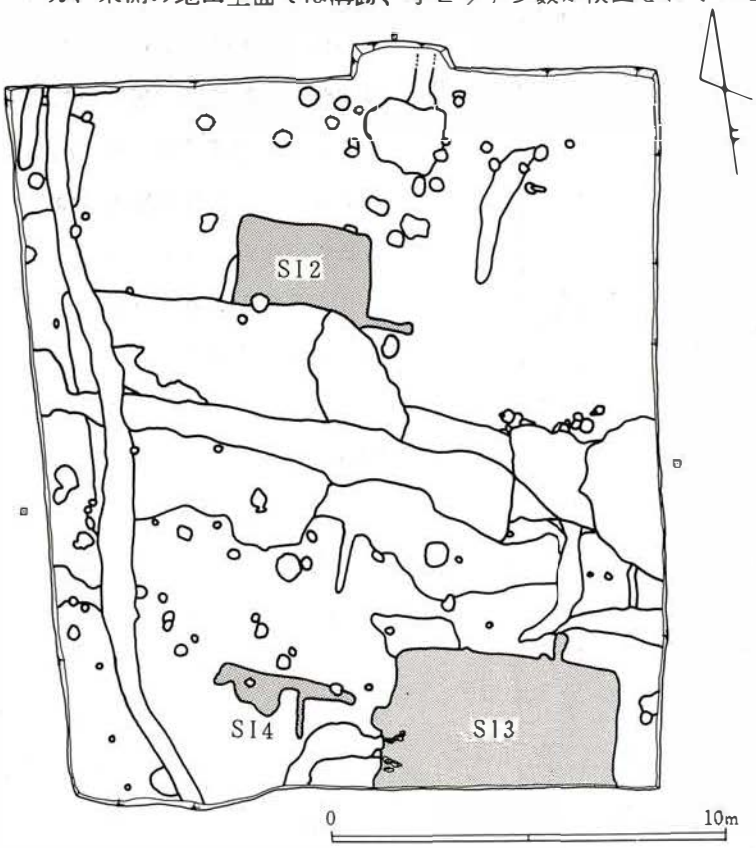
遺構は、竪穴住居跡３軒、溝跡８条、土坑２基以上、ピット多数を確認し、これらは互いに重複していた。この重複関係の中で一番新しいのはピットである。この他に調査区中央付近で遺構になる可能性がある堆積層を数枚検出した。ＳＩ２は、南側を堆積層（遺構埋土）に切られており、全体の規模は明確ではないが、北辺で3.3ｍを計る。カマドは、東辺に設けられ、煙道部は3.3ｍを計る。ＳＩ３は調査区南端付近で検出しており、南辺は調査区外へと延びている。したがって全体の規模は明確でないが、北辺で5.7ｍを計る。カマドは、北辺と西辺にみられ西辺では凝灰岩で作られた燃焼部、北辺では長さ0.8ｍまで煙道部を検出した。遺物はＳＩ２より瓦片が数点出土している。

第２図　第１トレンチ全体図

〈第３トレンチ〉

本トレンチ内の堆積層は、調査区の東側では地山がみられ、西側では灰黄褐色シルトが弧状を描いて分布していた。この堆積層の上面では遺構は確認できなかった。そして、堆積状況を把握するため、調査区の西壁沿いに深掘りを行った。その結果、土層は大別３層、細別９層に分層され、地山の傾斜に沿って自然堆積している様子が観察された。地山（岩盤）までの層厚は最深で1.25ｍを計る。なお、Ⅳａ層とⅣｂ層の層界には灰白色火山灰のブロックが確認された。出土遺物には、Ⅲ層より土師器、須恵器、緑釉陶器、中世陶器（東海産（常滑・渥美窯）および地元窯の無釉陶器甕・擂鉢）、青磁椀、白磁皿がある（第６図10～12・第７図１・５）。

一方、東側の地山上面では溝跡、小ピット多数が検出されている。

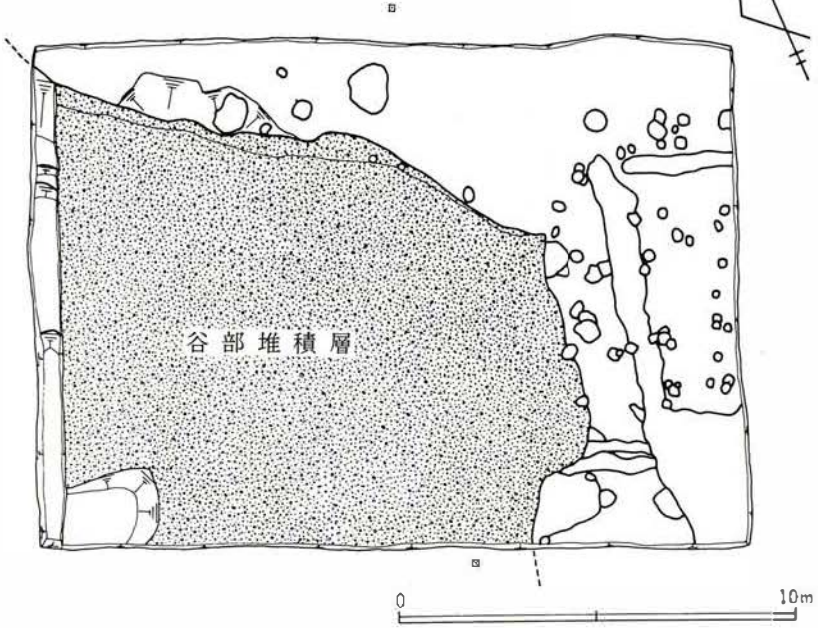


第3図　第2トレンチ全体図

〈第4トレンチ〉

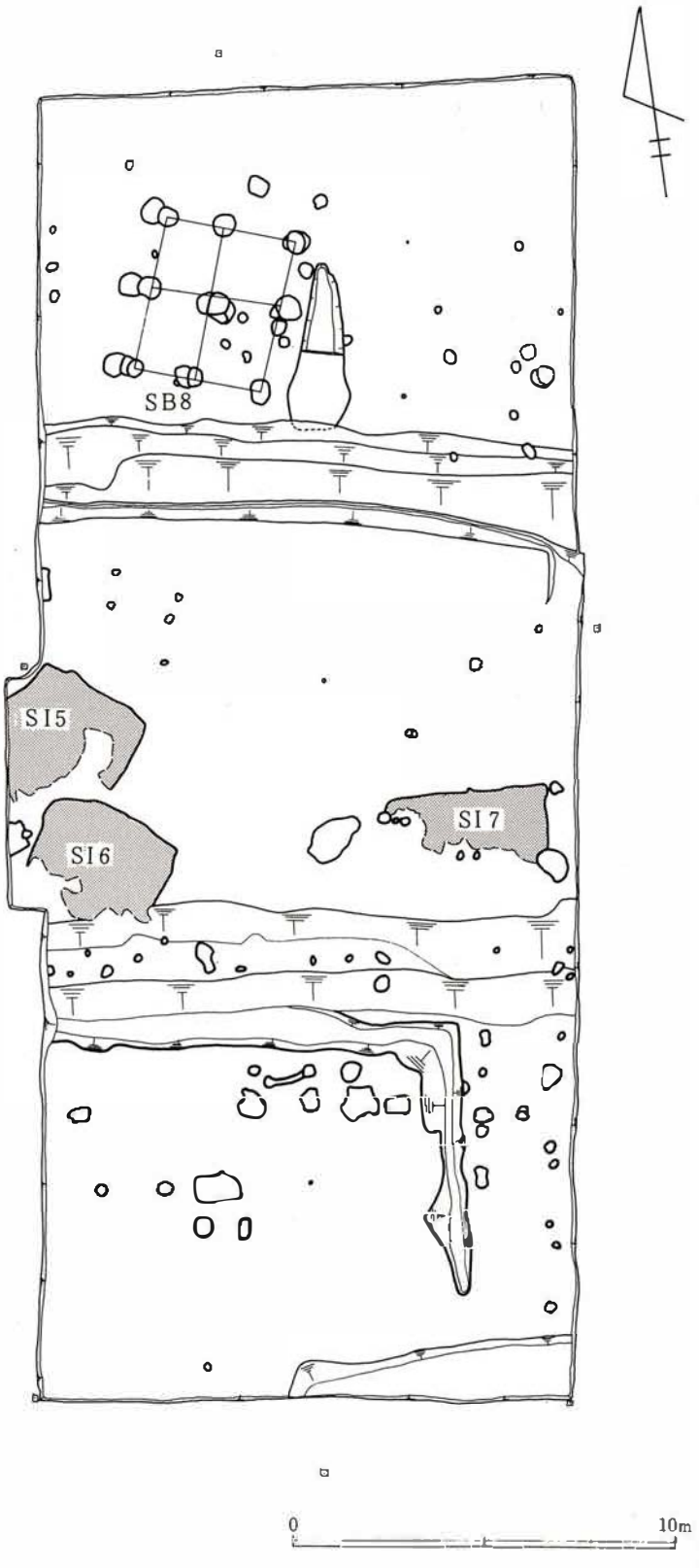
本トレンチでは表土下が遺構検出面（地山）となっていた。ここでは調査区内が後世の削平により段がつくられているため上・中・下段面に分けて記述していく。

上段面では、東西2間×南北2間の総柱建物跡が検出され、ほぼ同位置で2時期の重複が認められた。（ＳＢ８Ａ・Ｂ）柱痕跡は新旧いずれの時期のものも確認し得なかった。建物跡の規模は柱穴のほぼ中央に柱位置を推定すると西側柱列で総長約4ｍ、北側柱列で約3.4ｍを計る（新しい時期の柱穴）。方向は磁北に対して、北で約20度東に偏している。柱穴は一辺約0.5ｍの隅丸方形を呈する。この他小ピットを若干検出している。



第4図　第3トレンチ全体図

中段面では竪穴住居跡3軒を検出した。これらはいずれも南半が削平を受けており、全体の形態は明らかになっていない。ＳＩ５とＳＩ６は重複関係にあるが、埋土に直接



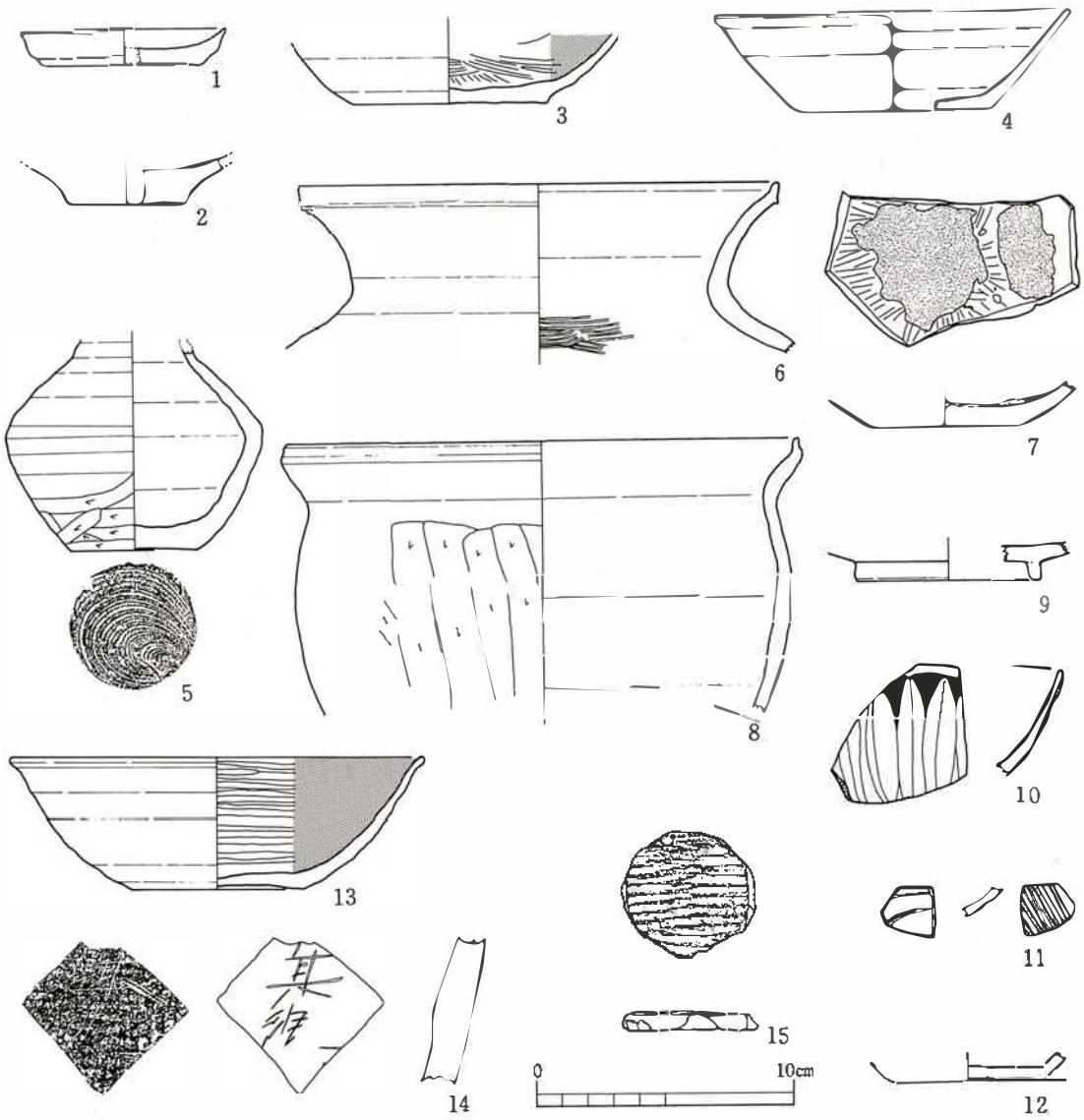
第5図　第4トレンチ全体図

の切り合いがないためその新旧については不明である。しかし住居跡の主軸方向や規模が共通しているので建て替えの可能性もある。カマド等の施設は確認されていない。ＳＩ７はＳＩ５・６より約５ｍ東に位置している。住居の主軸方向はほぼ磁北に沿い、ＳＩ５・６とは異なる。規模は北辺で4.3ｍを計る。カマド等の施設は検出されていない。遺物は、各住居跡の検出面より土師器杯・甕の破片が出土しており、いずれもロクロを使用したものである（第６図13）。須恵器には杯があり、底部の特徴は回転糸切りで無調整である。

下段面では小ピットが多数検出されている。ピットから出土した遺物には、近世の陶器椀（第７図10）がある。

〈第５トレンチ〉

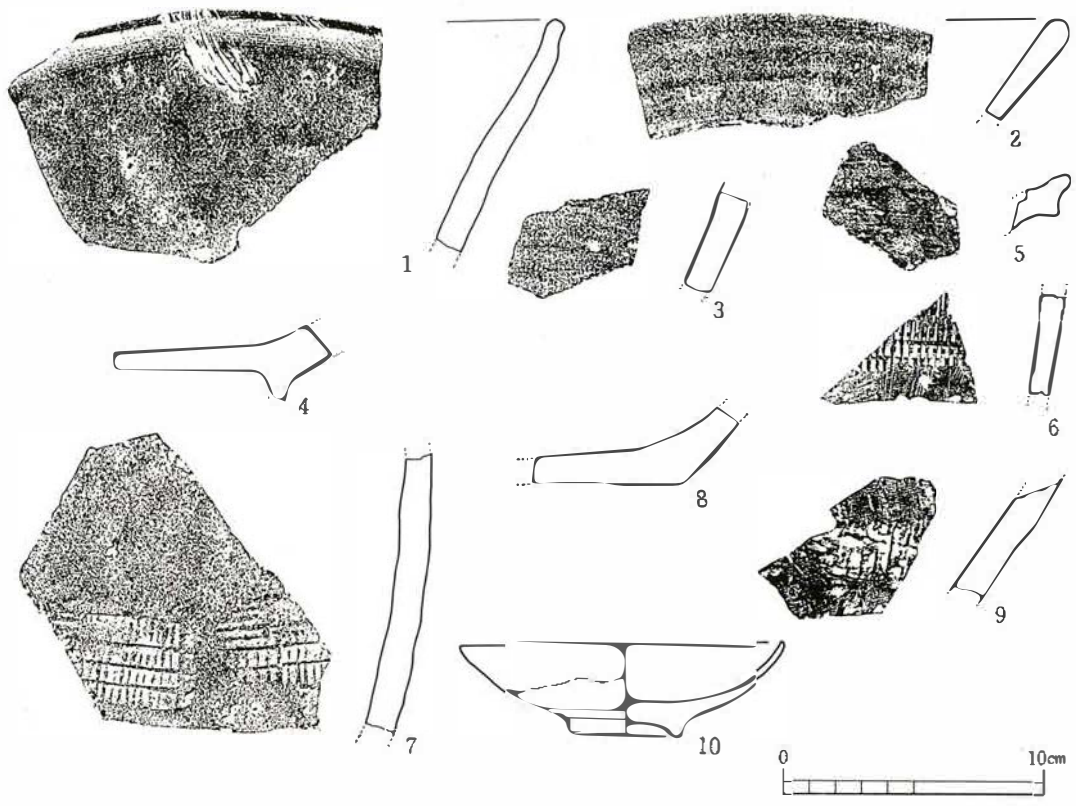
本トレンチの堆積層はⅠ層～Ⅷ層までに分層され、地山面までの層厚は約1.5ｍを計る。Ⅱ～Ⅷ層は褐灰色シルトが主体の層で、Ⅶ層以下がグライ化している。各層の層界は平坦で、自然堆積の様相を示している。またⅦ層には灰白色火山灰粒が混入していた。各層の上面、および地山面では遺構は検出され



(単位cm)

図番号	種別	器種	地区・遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	割高	備考	登録番号	写真図版
1	カワラケ	小皿	1T SD1 ℓ−2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/2	(7.9)	(5)	1.4		R−58	
2	カワラケ	小皿	1T SD1 ℓ−2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/2	—	(4.6)	—		R−57	
3	土師器	杯	2T 1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理		—	7.5	—	外面全体摩滅している	R−2	
4	須恵器	杯	2T 1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	1/2	(13.8)	(7.5)	3.8		R−3	2−2
5	〃	小型壺	2T SD1 ℓ−1	ロクロナデ、体部：中央回転ヘラケズリ 体部：下半手持ちヘラケズリ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	体部〜底部		2.8			R−1	
6	〃	甕	2T 黒色土	ロクロナデ、体部：平行叩き	ロクロナデ、刷毛目？	口縁〜体部	(18.7)				R−4	
7	土師器	杯	3T 皿層	体部・底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理					内面に漆付着	R−6	
8	〃	甕	3T 皿層	口縁部：ロクロナデ、体部：ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁の1/2残	(20)				R−7	2−5
9	緑釉陶器	皿	3T 1層	ロクロナデ、ヘラミガキ	ロクロナデ、ヘラミガキ	高台1/2残				内外面に後裔緑色の軸	R−18	2−11
10	青磁	椀	3T 皿層							連弁、ケズリ出し	R−20	
11	青磁	椀	3T 皿層							内面〜花文 外面〜蓮目	R−21	2−12
12	白磁	皿	3T 皿層	底部：回転ヘラケズリ						内外面に軸	R−19	2−1
13	土師器	杯	4T SD7 ℓ−1	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	1/2残	(16.1)	(6.6)	5.0	外面に墨痕あり	R−8	2−3
14	須恵器	甕	5T 皿層	平行叩き	ナデ					外面にヘラ描き	R−9	2−4
15	円盤状土製品		5T 1層	平行叩き	ナデ	完形				須恵器の甕を転用	R−10	

第6図　出土遺物実測図



（単位cm）

図番号	種別	器種	地区・遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	無釉陶器	壺	3T Ⅶ層	ナデ	横ナデ						R−22	2−6
2	無釉陶器	甕	3T 1層	横ナデ	横ナデ						R−23	2−7
3	無釉陶器	壺	3T 1層	横ナデ	横ナデ						R−25	2−9
4	無釉陶器	壺	3T 1層	ロクロナデ	ロクロナデ						R−24	2−10
5	無釉陶器	壺	3T Ⅶ層								R−29	
6	無釉陶器	壺	3T 1層	ナデ	ナデ					格子目押さ	R−30	
7	無釉陶器	壺	3T 1層	ナデ	ナデ					格子目押さ	R−31	2−8
8	無釉陶器	甕	3T 1層	ナデ							R−32	
9	無釉陶器	甕	5T 1層	ナデ，指オサエ	ナデ					格子目押さ	R−33	
10	陶器	陶	4T Ⅶ層上	体部：ロクロナデ、底部：回転ヘラ削り						近代	R−43	2−13

第７図　出土遺物実測図

なかった。遺物はⅦ層より土師器杯・甕、須恵器杯・甕、瓦の破片が出土している。

〈第６トレンチ〉

本トレンチの堆積層は２層に分層され、地山面までの層厚は約30cmを計る。Ⅰ層は表土、Ⅱ層が褐色シルトである。調査区西端付近には褐色シルトの分布がみられ、第５Ｔから続く谷の東端に堆積する土層と考えられた。この谷部の堆積層は３層に分層され、砂岩・凝灰岩粒、地山ブロックを多量に含むのが特徴である。遺物は、縄文土器、須恵器甕の破片が出土している。地山面では遺構は検出されなかった。

5 まとめ

今回の調査は遺構確認調査であるため遺構の年代および遺構の構造について詳述できない面もあるが、以下に成果をまとめてみることにする。

1．第１TのＳＤ１溝跡の年代は、出土しているカワラケの特徴より中世頃と考えられる。

2．第２Tで検出された遺構のうち、竪穴住居跡の年代は、出土遺物等からみて奈良・平安時代と考えられる。その他の小ピット、溝跡については、重複関係より竪穴住居跡を切っている傾向があるので、それ以降とすることができる。

3．第３Tでは谷の東端を検出することができた。この谷に堆積した土層の年代については、下層に灰白色火山灰のブロックを含む層があることや、上層で中世の青磁、白磁、カワラケが出土していることより、おおむね平安時代～中世頃とみておきたい。

4．第４Tでは総柱の建物跡、竪穴住居跡が検出された。竪穴住居跡は３軒あり、いずれにもロクロ調整の土師器破片が埋土中に含まれていることより、平安時代頃のものと思われる。

5．第５Tは谷の一番深いところにあたる。地山直上層には灰白色火山灰のブロックがみられることから、土層の堆積は10世紀前半頃に始まったものと考えられる。

6．第６Tでは谷の東端が検出された。また、堆積土に縄文土器片が含まれており、付近に該期の遺構の存在も考えられる。

7．以上のことより、本遺跡内には古代～中世までの遺構が広範囲に分布していることが判明した。遺構は丘陵の南緩斜面にみられ、谷部においては検出されなかった。古代～中世にかけての地形は現地形よりもかなり深く谷が入っていることが知られ、かなり起伏に富んだ地形を形成していたものと考えられる。

写　真　図　版

第１トレンチ南半全景（北より）

第２トレンチ全景（南より）

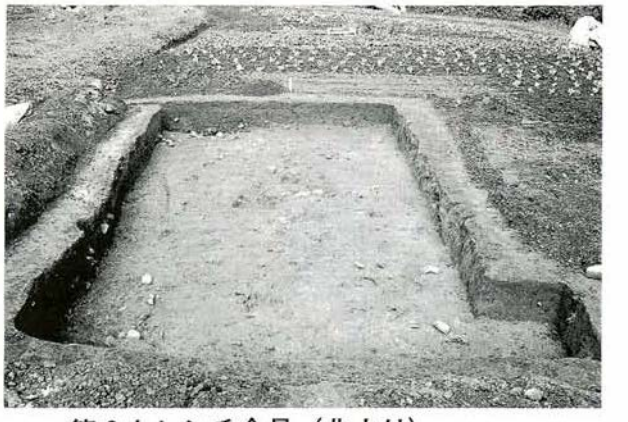
第２トレンチ　SI2検出状況（西より）

第３トレンチ全景（南より）

第４トレンチ全景（西より）

第４トレンチ　SB８A・B（東より）

第４トレンチ　SI5・6検出状況（東より）

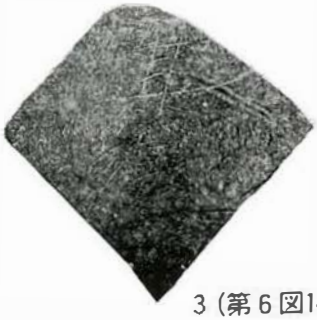


第６トレンチ全景（北より）

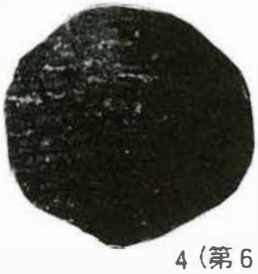
写真図版１

1 (第6図13)

2 (第6図5)



3 (第6図14)



4 (第6図15)

5 (第6図9)

6 (第7図1)

8 (第7図7)

9 (第7図3)

7 (第7図2)

10(第7図4)

11 (第6図10)

12(第6図12)

13(第7図10)

出　土　遺　物

多賀城市文化財調査報告書第29集

山　王　遺　跡 ほか

— 発掘調査報告書 —

平成4年3月31日 発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電　話（022）368－0134

印刷　渡　辺　印　刷
塩釜市旭町17番13号
電　話（022）364－3161